２０２４年１月ＮＨＫ四国地方放送番組審議会

１月のＮＨＫ四国地方放送番組審議会は、１５日(月)、リジェール松山において、１０人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、「ＮＨＫ経営計画　2024-2026 年度」の概要についての説明があり、議事に入った。

会議では、事前に視聴してもらった四国らしんばん　スペシャル「シコクディグ　鳴門わかめ　終わらない偽装」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	三好　賢治	（伊予銀行代表取締役頭取）
副委員長	藤本　聡	（四国旅客鉄道 常務取締役）
委　　員	金行　亜弥	（愛媛新聞社　論説委員室委員）
	上月　康則	（徳島大学環境防災研究副センター長）
	小松　圭子	（有限会社はたやま夢楽　代表取締役社長）
	田井ノエル	（小説家）
	前本　千恵	（三浦工業株式会社 ミウラート・ヴィレッジ（三浦美術館）学芸員）
	三木千佳子	（徳島県邦楽協会会長）
	皆見　信博	（パラ卓球選手）
	村上健太郎	（特定非営利活動法人ＮＰＯ砂浜美術館理事長）

（主な発言）

＜四国らしんばん　スペシャル「シコクディグ　鳴門わかめ　終わらない偽装」（総合　１月１９日(金)放送）について＞

○　2023 年４月７日（金）の四国らしんばんスペシャル 「シコクディグ～地域

おこし協力隊のリアル～」（総合 後 7:30～8:13）では、問題解決に重要な役割を持つ行政への取材が少なかった印象だったが、今回も行政や業界団体への取材が少なかったように感じた。徳島県鳴門わかめ認証制度の話はあったが、２０年近くにわたり繰り返される産地偽装に対して、番組からもっと危機感が感じられたらよかった。鳴門わかめは多くの業者をはさんで消費者の手元に届いていることが分かったが、それぞれの業者の責任の範囲や法律に関しての説明があるとより理解しやすかったと思う。番組を通して、産地のプライドが地域の価値を作っていると感じた。手法は異なるが、人物を中心に取り上げたドキュメンタリーや今回のような調査を通して問題点を掘り下げていくという番組など、さまざまな角度から番組が制作されることが地域にとって大切だということを実感した。

○　鳴門わかめが産地偽装されやすい課題や理由、対策など順を追って説明していたため、初めて鳴門わかめを知る人にとっても理解しやすい番組だったと思う。一方で、鳴門わかめの生産・加工をする後藤弘樹さんがスタジオゲストだったが、１人だけが産地を担うような登場のしかたはあまり好ましくないと感じた。また、この問題に対する業界団体や県の認識をもっと知りたかった。徳島県の認証マークの紹介もされていたが、これが有効な手段と思えなかったため、三陸わかめの取り組みとの差が大きいと感じた。産地偽装は許されない行為ではあるが、安いものを求める消費者や価格高騰をよくないものであるかのように報道するマスコミの姿勢にも、産地偽造を助長させている原因があるのではないかと思う。私たちが口にするすべての食材を把握するのは難しいが、番組を通して消費者が産地を知って学べるような機会を作ってもらいたいと思う。

○　この番組を通して何を一番伝えたかったのか、いまひとつ分からなかった。鳴門わかめに対するマイナスなイメージばかりに焦点が当たっていたように感じた。全国から集めた５０商品の産地を調べる行動はすばらしいと思ったし、鳴門わかめが偽装されてしまった歴史や理由を探る部分はよかったが、番組を通して鳴門わかめの生産者全般が偽装しているかのようにも受け止められかねないのが残念だった。また、過去に鳴門わかめの偽装が告発された際に、地元の生産者が偽装をなくす取り組みをしていたと聞いたことがあるが、番組ではそうした取り組みが紹介されていなかった点も残念だった。徳島県鳴門わかめ

認証制度について、生産者ではなく行政がやるべきことではないかと思った。ＮＨＫの番組としては、偽装で評価が下がってしまった鳴門わかめが今後も頑張っていけるように応援する要素も入れてほしかった。また、ゲストにベッキーさんが選ばれた理由が気になった

○　産地偽装の疑いがあった業者のところまで足を運んで取材し、コメントを引き出せたのはすごいことだと思った。ゲストの後藤さんのコメントが、偽装問題をこのままにしてはいけないという気持ちにさせてくれた。初めはなぜベッキーさんがゲストなのか疑問に感じたが、コメントが分かりやすく的確で気持ちよく見ることができた。全体的に法律や行政の取り組みについて情報が少なかったことが気になった。実際に取材した業者の赤裸々なコメントは、見ていて興味をひかれた。番組では、鳴門わかめの複雑な流通の問題点が丁寧に説明されていたため、より三陸わかめのような取り組みの重要性を理解することができた。ゲストのベッキーさんに、中国産わかめを渡す場面があったが、同時に鳴門わかめも渡して比較してもらうような演出でもよかったと思う。鳴門わかめの産地偽装問題の解決には行政の力が必要であるため、番組の調査結果を徳島県に託したことは納得のできる結論だったと思う。

○　番組では、過去の行政指導の実態や摘発された元業者の言い分、流通の仕組みなどをわかりやすく紹介していたため、鳴門わかめの産地偽装の背景がよく分かった。今回の調査結果を徳島県に伝えたということだったため、今後の県の防止策に注目したい。一方で、県としてこの問題をどう受け止めているのか取材してほしかった。紹介されていた三陸わかめの取り組みは有効だと感じたため、ぜひ鳴門わかめにも取り入れてほしいと感じた。鳴門わかめは歴史があるだけに仕組みを変えるのは大変ということを紹介していたが、業界団体や県、国が連携して改革してもらいたいと感じた。ベッキーさんがゲストだったことについて疑問に感じていたが、消費者視点でコメントをしており、明るいキャラクターが重たい雰囲気の番組を救っていた部分があったと思う。ほかのゲストの方もそれぞれの立場で解説や提言をしていたため、内容の理解につながった。

（ＮＨＫ側）

フェイクニュースなどさまざまな情報があふれる中、「シコ

クディグ」ではディレクターや記者がデータや現地取材を駆使して四国の課題を深く掘り下げて、真相に迫る調査報道を目指している。以前から鳴門わかめの産地偽装の問題は存在していたが、昨年１２月に鳴門わかめと偽って中国産のわかめを販売していたとして書類送検されていた徳島市の食品卸売業者の元代表を、検察が不正競争防止法違反などの罪で在宅起訴したという事案があった。この件に対して、地元の放送局として重く受け止め、なぜこの問題が終わらないのかということに向き合わなければいけないという話になり、このタイミングで番組を制作することになった。また、産地偽装と向き合うために、番組を通して業界団体や行政に対して問題提起をしたいという目的があった。ゲストでベッキーさんを起用したのは、鳴門わかめの収穫経験があることと、子どもがいて食の安全にも関心が高いということで、消費者目線のコメントをしてほしいという目的があったからである。今回の問題提起をきっかけに、徳島局としては行政や業界団体の取り組みなどを今後も引き続き取材して伝えていきたいと考えている。

○　センシティブで、扱いにくいテーマでありながら、産地偽装問題に深く踏み込もうとする制作者の意気込みを感じる番組だった。産地偽装が起こる裏側を知ることができて、消費者目線で非常に興味深く、飽きない構成だった。鳴門わかめの偽装が、初めて発覚したのが 2008 年でそれから２１件も立件されているという事実にまず衝撃を受けた。また、三陸わかめの管理方法の紹介があったことで、鳴門わかめがより産地偽装がしやすい環境になっていることが理解できた。一方で、番組冒頭では重い雰囲気の報道番組のような演出がされていたが、スタジオに切り替わった途端に松山局の永井伸一アナウンサーとベッキーさんが明るく振る舞っていたことに違和感を覚えた。どの方向性で番組を見せたいのか分からなかった。さらに、取材者に対して突撃取材している場面があったが、取材者に対しての配慮が足りていない印象を受けるため、突撃取材はできるだけ避けるべきだと感じた。

○　番組を通して、鳴門わかめは産地を証明する根拠の薄さや日本特有の中間加

工業者の多さ、生産から販売までの流通の複雑さなどが原因で産地偽装が起こりやすい環境になっていることを理解した。個人の力だけでなく、国や行政が関わって業界全体で産地偽装が行われないように管理していくことが大切だと感じた。一方で、徳島県の認証マークを取得しているのは対象となる300社中２０社にとどまっていることや、1500年以上歴史があり新しいことに取り組むことが難しいなど多くの課題があることがよく理解できた。深刻なテーマだったため番組が暗くなりがちなところを、ゲストのベッキーさんの視聴者目線のコメントや早見沙織さんの柔らかいナレーションで、暗い雰囲気を和ませていてとてもよかった。また、ふだんより字幕が見やすくて分かりやすかった。一方で、中国産のわかめをベッキーさんに見せる場面では、鳴門わかめも見せて比較したほうがよかったのではないかと思う。

○　安定同位体比という科学技術を用いた産地推定をしていて、この問題に対して「なんとかしなければいけない」という番組制作者の強い思いが感じられた。また、こうした調査を用いたことで、説得力のある番組になっていた。ぜひ全国に発信してほしい番組である。鳴門わかめは徳島県が全国に誇るブランドの一つだが、それが失われつつあることを残念に感じた。一生懸命ブランドを守ろうとしている後藤さんはゲストとして適任であり、後藤さんのような生産者が損をしない仕組みになってほしいと思った。また、ベッキーさんの視聴者目線のコメントも的確で、番組の雰囲気を重くしないように振る舞っていたのが印象的だった。一方で、わかめの産地偽装をした際の刑罰や検挙された業者はその後どうなったのかについてもっと知りたかった。また、徳島県漁業協同組合連合会だけでなく徳島県知事の意見も知りたかったため、取材をしてほしかった。

○　食品の産地偽装は、無理なニーズに応えるプレッシャーや継続性や集団性による罪悪感の欠如が原因になっていると感じた。科学的な分析や調査など粘り強い取材を通じて、問題を深く掘り下げており、ＮＨＫの本気度を感じる非常に見ごたえのある番組だった。産地偽装などの問題は時がたつにつれて、人々の心から忘れ去られる傾向にあるため、この時期の放送は非常に意味があったと思う。ゲストがそれぞれの立場で意見を述べており、問題の核心と解決策を視聴者に訴える形で議論が展開されていてよかった。一方で、なぜベッキーさんがゲストだったのか疑問に感じた。鳴門わかめ業界でもブランド価値を守る

ための取り組みをするべきだと感じたが、古い商習慣や新しいシステムを導入する費用などを理由に業界団体が変われないことは、産地偽装が続いてしまう本質の一つだと感じた。業界団体が率先して対策していくべきだということを番組の中でもっと強く示してほしかった。

○　粘り強い取材があったことで産地偽装を取り巻く業者の赤裸々な本音に、迫ることができていた。日本で作られるものは非常に価値があるということを消費者も理解し、海外にもその価値を売って利益を出していくような循環が非常に必要だと実感した。質の高いものや手のかかったものなどブランド力のある品物が高く評価されるような社会の仕組みになるべきだと思う。一方で、鳴門わかめの収穫経験があることや食の安全に関心があるという理由でゲストにベッキーさんが選ばれたと友澤さんより説明があったが、番組の中でもベッキーさんについてもっと詳しい紹介があれば、視聴者もゲストの人選に納得できたのではないか。「シコクディグ」は第２弾として評価できる内容だったため、今後もこのシリーズに期待する。一方でこれまでの番組はネガティブな事柄を深く掘り下げるという内容だったため、今後は物事のよい面を深く掘り下げる内容も期待したい。

○　鳴門渦潮の映像と早見さんのナレーションが爽やかなオープニングは、テロップを効果的に使っていて視聴者を引き付ける工夫がされていた。また、追跡調査や独自のインタビュー映像など飽きさせない構成になっていた。元農林水産省の食品表示Ｇメンの中村啓一さんの説明は分かりやすく、番組においてとても重要な部分であったと感じる。鳴門わかめは歴史があり高価でブランド力もあるが、そのブランドを守る努力を怠ったことも長期間にわたって産地偽装が行われている大きな要因だと思った。産地偽装がなされないように管理していくことが大切であると感じたが、流通をより簡素化して産地証明や認証マークがもっと広く活用されれば、産地偽装は改善されていくのではないかと思う。また、産地偽装を行う業者を業界から締め出すルールなどがあればよいと思う。今回の番組は、若年層にも分かりやすく食の安全と安心、そして産地を守ることの大切さを伝えた番組だった。

（ＮＨＫ側）

今回の番組は、なぜ産地偽装は終わらないのかについて

問題提起するような内容になっている。番組を通して、この問題がよい方向につながっていくようにという強い思いで番組を制作した。今後は問題提起だけにとどまらず、どのように行政や業界団体がその問題を受け止めているのか、これからどのように課題に取り組んでいくのか継続的に取材して追っていきたい。また、昨年１２月に在宅起訴された食品卸売業者については、これから裁判が始まっていくことになるため、ＮＨＫとしては裁判所がどのような判断を下すのか引き続きニュースなどで取り上げていきたい。また、ご指摘にあったように、物事の問題や課題などを取り上げる内容だけではく、よい部分に焦点を当てて深く掘り下げていくような番組も今後検討していきたい。

＜放送番組一般について＞

○　１月１日に発生した能登半島地震の被害状況をみてみると、南海トラフ巨大地震が起きたら四国でも同じような被害が出ると感じた。今回の災害は、四国に住む私たちにとってたくさんの教訓が得られると感じる。そのため、報道番組などで被災地を取り上げる際は、視聴者が自分事として捉えるような見せ方を意識してほしい。例えば徳島県の職員が地震直後から被災地の支援にあたっているが、自分たちの周りでも能登半島地震に関わっている人がいるということを取材してもらえると、視聴者にとってより災害を自分事として捉えることができるのではないか。引き続き、能登半島地震や津波については、遠い地域で起こった災害という認識ではなく、南海トラフ巨大地震につながるものだという視点で取材してもらいたい。

○　能登半島地震の影響で、福井県や富山県、石川県の金沢市内などそれほど大きな被害が出なかった地域でも、旅行のキャンセルが相次ぎ観光事業が苦労しているという話を聞いた。地震直後はなかなか難しいと思うが、今後平常に戻っている地域の観光業を積極的に取り上げることで、旅行に行くことも地域への支援になるということ伝えてほしい。また、１月２日に羽田空港で起こった日本航空機と海上保安庁機の衝突事故では、現場の判断で避難扉を開けて乗客

を避難させたそうだ。現場の判断で行うことは非常に責任を伴う行動であり、もしかしたら逆の結果が起こったかもしれない。しかし、そんな状況の中で今回は結果として適切な判断で乗客全員を避難させることができていた。このように物事の成功例やよかった面を深く掘り下げていく番組もよいのではないかと感じた。今後はそうした視点の番組も期待したい。

ＮＨＫ松山放送局
番組審議会事務局

２０２３年１２月ＮＨＫ四国地方放送番組審議会

１２月のＮＨＫ四国地方放送番組審議会は、１８日(月)、リジェール松山において、１０人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、５月１５日（月）に放送した「ニュースウオッチ９」報道へのＢＰＯ意見について報告があり、議事に入った。

会議では、事前に視聴してもらった「みかんの谷と生きる　～西日本豪雨　父と子の５年～」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	三好　賢治	（伊予銀行代表取締役頭取）
副委員長	藤本　聡	（四国旅客鉄道　常務取締役）
委　　員	阿部　和孝	（松山市農業協同組合　代表理事組合長）
	上月　康則	（徳島大学環境防災研究副センター長）
	小松　圭子	（有限会社はたやま夢楽　代表取締役社長）
	田井ノエル	（小説家）
	前本　千恵	（三浦工業株式会社 ミウラート・ヴィレッジ（三浦美術館）学芸員）
	三木千佳子	（徳島県邦楽協会会長）
	皆見　信博	（パラ卓球選手）
	村上健太郎	（特定非営利活動法人ＮＰＯ砂浜美術館理事長）

（主な発言）

＜「みかんの谷と生きる　～西日本豪雨　父と子の５年～」
（総合　１１月２５日(土)放送）について＞

○　西日本豪雨被災後の映像や避難所での生活、愛媛みかん発祥の地の誇りを持って復興へ取り組む様子など、清家明さんと家族の５年間がうまくまとめられ

ていた。これからの住まいをどうするのかと家族で話し合っている様子や新型コロナウイルスの流行といった困難をリアルに記録している点が印象的だった。災害は忘れたころにやってくるため、西日本豪雨の被害の記録として後世に伝え続けてほしい内容だった。みかん農家の後継者不足が深刻な中、苦労を乗り越えて前に進む明さんに勇気をもらった。今回の番組のように農業に関心を持つような内容を、引き続き取り上げて放送してほしい。一方で、清家さん一家のみが取り上げられていたため、ニュースの延長とも思える単調な内容だった。愛媛県宇和島市吉田町奥白井谷地区は活気がある町で景色もよいため、ドローンを活用して地域の全体像を映すなど引きのある映像を入れる工夫がほしかった。

○　５年という長期取材だからこそ描けるものがあったと感じる。「みかんの谷と生きる」というタイトルであるが、この「と」に込められた覚悟が、清家さん一家をはじめとしたみかん農家の方のことばから感じた。みかんの苗木の成長と息子の歩さんの成長がリンクされていて、胸が熱くなった。歩さんがみかん農家を継ぐ決断をしたが、子どもに幼少期から親の職場を見せるということが、人口減少問題の解決のヒントになるのではないかと感じた。これは地域と職場と生活が密接に結びついているからこそできる四国の強みだと思った。「復興っていうのは災害の前よりもよくなっていくこと」という明さんのことばは、「復興」ということばを改めて考えるきっかけになった。また、災害により地域が分断されるのではなく、時間をかけて地域の人々がその土地との関わり方を模索している姿が印象的だった。映像中にぼかしが使用されていたが、ぼかしをいれる基準があれば知りたい。

○　一般的に災害関連の報道は何年目といった節目の年に集中することが多い。被災者の生活は何も変わっていないのに、毎年災害が起きた日の前は多くの取材が来て、その翌日からは、全く取材に来なくなることがあり、被災者は社会から取り残されたと感じると聞いたことがある。今回の番組は５年間も長期にわたり取材をしていて、被災者に寄り添った向き合い方をしていると感じた。奥白井谷地区の「再編復旧」では、農家の方たちがそれぞれの犠牲や負担を分かち合い、協力して計画を立てていて感動した。一方で、復旧や復興には自治体など外部から多くの支援を受けていると思うため、そうした支援の内容についてもっと取り上げてほしかった。災害前よりも、よりよい地域や生活を目指

して復興することを「創造的復興」と言うが、明さんが「復興っていうのは災害の前よりもよくなっていくこと」と語っていた場面は番組全体を明るくしていたと思う。

○　明さんの言動や歩さん気持ちの変化を通して、ふるさとへの思いや家族の絆が伝わる内容の濃い番組だった。西日本豪雨の被害により、清家さん一家の人生が大きく変わってしまった様子がうまくまとめられていた。被災から４日後に地域の悲惨な状況を前にして「もう地獄ですよ」と話している明さんの様子から被害の大きさがよく分かった。また、取り壊されている自宅の様子を見ている明さんのまなざしもうまくとらえることができていたと思う。鈴村奈美キャスターのナレーションは、番組の音楽や映像と合っていて視聴しやすかった。また、奥白井谷地区の人たちのつながりの深さやみかん栽培の取り組みを丁寧に紹介していてよかった。一方で、「愛媛みかん発祥の地としての誇りを代々受け継いできた」という明さんの紹介は、番組のつながりからして冒頭にあったほうがよかったと思う。明さんがたばこを吸っているシーンがあったが、その映像は必要なかったのではないかと感じた。

○　災害や復興との向き合い方やその大変さ、家族や地域の絆や親子関係などまんべんなく伝えたかったと思うが、何を一番伝えたかったのか分からず、特に強く印象に残るものがなかった。清家さん一家が災害や復興に対して真剣に向き合う姿や芯の通った生き方と覚悟はすばらしく、この家族の絆が奥白井谷地区を守っていると感じた。一方で、淡々と事実だけを伝えているように見受けられて、少し単調に感じた。登場人物それぞれの思いをもう少し深く掘り下げてほしかった。特にみかん農家を継ぐと決心した歩さんが地域の人と関わる様子をもう少し伝えてほしかった。また、途中で別のみかん農家の宮本一成さんのインタビューがあったが、唐突な印象を受けた。さらに清家さん一家のみなし仮設住宅から奥白井谷地区までの距離も分からなかった。愛媛みかん発祥の地として誇りを持つ清家さんのみかんの魅力がもっと伝わる工夫があるとよかった。

（ＮＨＫ側）

この番組は、２人のディレクターが発災直後から５年間にわたって奥白井谷地区に通って記録してきた映像をもとに制

作した。担当ディレクターの１人が、西日本豪雨発生前の２０１８年２月に「新日本風土記」という番組で宇和島市を取り上げた際に、奥白井谷地区の方と縁ができた。発災直後にその方に連絡を取ったところ、地域が大変なことになっていると聞いて、発災の４日後から奥白井谷地区に通い取材を始めた。地域のリーダー的存在だった明さんを軸に編集していくことで、地域の全体像も見えてくるのではないかと思い、清家一家を中心とした番組を目指した。番組に対して単調に感じたという意見があったが、ディレクターの意図としてはあまり主観を入れずに、西日本豪雨で被災した明さんが、みかん作りや家族との生活にどう向き合っていくのかを記録していきたいという思いがあった。記録するという姿勢が清家さん一家を長期にわたり取材するうえで、非常に大事だったのではないかと思う。一方で、視聴者の中には淡々としている内容を退屈に感じてしまう方もいるかもしれないが、簡単に対案を示すことはできない。番組を通して防災の教訓についても触れることできたらよかったという意見は反映できる余地があるかもしれない。たばこを吸っているシーンについては、被災直後で疲労困ぱいの明さんの表情を一番よくとらえられていたカットだったということで、ディレクターが明さんに許可を取ったうえで使用することとなった。

（ＮＨＫ側）

番組の中で看板にぼかしを入れた場面があったが、それは電話番号が載っていたため、トラブルにつながらないようにぼかしを入れた。ぼかしを使用する基準としては、個人情報の特定につながる情報やプライバシー、人権、権利保護が必要な情報、また特定の宣伝につながる内容についてはぼかしを入れることになっている。また、事件や事故の被害者や被疑者、捜査関連の車両のナンバープレートについてもなるべく映らないようにするか、ぼかしを入れるように配慮をしている。状況に応じて判断しているため、そのつど担当者で議論しながら決めている。

○　奥白井谷地区で生活する人の思いや葛藤、復興の大変さを伝えつつ、最終的には未来へ歩いていく家族の様子を描いた後味のよい番組だった。被災直後から５年間も清家さん一家に取材をしていて、その年ごとに直面する問題が変化する中、家族に寄り添った丁寧な構成になっていたと感じる。新型コロナウイルスの流行による収入減や再編復旧計画の遅延、砂防ダムの建設など次から次へと困難が立ちはだかる中、奥白井谷地区から離れて暮らすかどうか真剣に家族で話し合うシーンには切実さがあった。「復興っていうのは災害の前よりもよくなっていくこと」と言った明さんの復興に対する姿勢や地域との向き合い方に胸を打たれた。被災直後は想像できなかった奥白井谷地区の和やかな様子が、番組の最後に映されていて未来へつながるようなよい締めくくりだった。明さんの孫の成長が５年という時間の経過を表現しており、番組の構成と合っていたと思う。

○　被災後からの映像が時系列でまとめられていて、理解しやすい構成になっていた。５年かけて取材をしたことで、歩さんの心情の変化がより伝わってきたと思う。また、番組の内容とタイトルがとても合っていた。みかん農家が減る中で、よりよい条件の土地で生産や出作することも選択できると思うが、明さんがあえて奥白井谷地区を選ぶのは、生まれ育ったからというだけでは伝わりきらない思いがあると感じた。西日本豪雨後にその地域から離れて暮らす世帯も多い中、これから暮らす住まいをどうするのかについて家族で話し合っている場面では、清家さん一家にしか分からない葛藤や計りしれない思いがあると実感した。奥白井谷地区の場所の紹介に、四国全体の地図が用いられていたが、宇和島市吉田町をアップにした地図のほうが分かりやすかったのではないか。また、ドローンの映像などを活用して奥白井谷地区の土地や景色をもっと紹介してほしかった。

○　西日本豪雨を経て、奥白井谷地区の人々がこの５年間でどのような復興を行なってきたのかよく分かった。「○年○月（豪雨から○カ月）」という表記がシーンごとに表示されていたことで、流れを理解しやすくなっていた。奥白井谷地区の再編復旧計画について、長期にわたる大変さや地理的な問題で工事が遅れるという問題点もイメージしやすく工夫されていた。家を取り壊したり、砂防ダム建設のためにみかんの木を切って苗木に利用したり、これからの住まい

をどうするのか家族で話し合ったりとさまざまな決断をした映像があり、被災者の現状をリアルに想像できた。明さんが真剣に地域のことを考えて行動する姿は魅力的だった。歩さんの明さんに対するコメントからも親子のよい関係が伝わり、みかん農家を継ぐという決断までの根拠が感じられる構成になっていたと思う。人の生き方や考え方で感心させられる部分が多く、危機に直面した際の人間の強さを魅力的にとらえられていて前向きになれる内容だった。

○　西日本豪雨で奥白井谷地区のみかん畑の約４割が被害を受け、みかん農家としての収入が被災前の６割まで落ち込む中、自分のことを後回しにして、地域のために奮闘する明さんの姿に元気をもらった。被災した映像だけでなく、実際の被害額や災害エリアを地図のようなもので示せば、被害状況がより視聴者に分かりやすく伝わったのでないかと思う。明さんが地域のリーダー的存在として行政と協議に臨むシーンがあったが、その後どのように課題が解決したのか気になった。また、明さんと家族との間にはこれからの住まいに対する意見の相違があったのではないかと思うが、最終的に清家さん一家がどのような決断をしたのか知りたかった。西日本豪雨はテーマとしては非常に重要であるため着眼点は評価できるが、内容はやや不完全燃焼でもの足りなさを感じた。清家さん一家の心境や実際の行動をもっと深く掘り下げてもよかったのでないかと思う。

○　奥白井谷地区の自宅を解体する様子を見つめる明さんと妻の昌呼さんの姿を目の当たりにすると、熱く胸にこみ上げるものがあった。５年前、先行きの不透明な状況の中、取材を受け入れた清家さん一家や粘り強く取材を続けてきた制作スタッフには敬意を表したい。冒頭から歩さんの明さんに対する尊敬の念は語られるも、明さんから歩さんに対する感謝の思いは後半になるまで語られることがなかった。また、はじめは敬語で取材に応じていた明さんが、徐々に打ち解けて方言で思いを語っている姿が印象的だった。５年という時を重ねる中で、制作スタッフとの距離が縮まり、少しずつ前向きなことも考えられるようになったのだと思う。また、みなし仮設住宅に移ったものの家族それぞれがこれからの住まいについて思いを語る場面も印象的だった。最終的に再び奥白井谷地区に戻るのか、それとも地域から離れて暮らすのかどちらの選択をしたのか結論が知りたかった。

○　西日本豪雨から５年がたち、目に見える形で復興は進みつつあるが、被災者にとってはまだ葛藤の日々であると改めて実感した。被災４日後からこの５年間を丹念に追っていて、その時々の映像もあり継続的な取材ならではの番組構成に感心した。みかん農家は高齢化や後継者不足という課題もあるため、若者が地域に戻ってくることは希望になると感じた。明さんにとっても息子や孫の存在が生きる糧になっていたと感じた。奥白井谷地区の復旧の手伝いで、一時的に実家に帰ってきていた歩さんは、はじめみかん農家を継ぐことは考えていない様子だった。しかし、仕事をやめて地域に戻り、最後には「継ぎます」と言い切っていた姿が印象的だった。今後も清家さん一家を引き続き取材してもらいたい。西日本豪雨関連の報道は、被害のあった７月に集中するが、今回の番組を１２月に放送したのは、みかんの収穫時期だからなのかその意図が気になった。

（ＮＨＫ側）

清家さん一家が今後奥白井谷地区に戻るのか、離れて暮らすのかについてはまだ結論が出ていないため、番組の中ではあえて触れなかった。しかし、視聴者にとっては最終的にどうなったのか気になる部分であったという意見それ自体は受け止めたい。歩さんがみかん農家を継ぐ決断をしたことは、ディレクターも予想していなかった。ディレクターがこの５年間清家さん一家を追ってきた中で、一番印象に残った出来事だったこともあり、歩さんがみかん農家を継ぐことが番組の軸になっていった。その分これからの住まいの話や再編復旧計画の課題の部分まで深く掘り下げて伝える余地がなかったように思う。ご意見頂いた奥白井谷地区を示した地図については視聴者が理解しやすいようにもっと気にかけるべきだったと感じる。もう一つ反省としては番組終盤で「いまだ半数の人が集落を離れて生活する中、久しぶりに顔を合わせることができました」というナレーションをしたが、「いまだ」ということばに対して、ある被災者の方から奥白井谷地区に帰ることが前提になっている表現だという指摘を受けた。奥白井谷地区を長期取材させていただいたうえで、地域の皆さんは再び奥白井谷

地区に戻りたいという意識があるのではないかと実感したため、そのようなナレーションの表現にした。しかし、被災者の地域への思いやそれぞれ抱えている状況は異なるため、今後は被災者の一人一人に配慮した表現や伝え方を徹底していきたい。

＜放送番組一般について＞

○　１２月１５日（金）放送のひめＤＯＮ！「松山商×熊本工　２８年目のバックホーム」を視聴した。1996 年夏の全国高等学校野球選手権大会決勝から２８年ぶりに当時の選手たちが集まり松山で試合をするという内容を取り上げていて、非常によい番組だった。

ＮＨＫ松山放送局
番組審議会事務局

２０２３年１１月ＮＨＫ四国地方放送番組審議会

１１月のＮＨＫ四国地方放送番組審議会は、２０日(月)、リジェール松山において、１０人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、令和５年地上基幹放送局の再免許にあたっての総務大臣の要請の紹介があり、議事に入った。

会議では、事前に視聴してもらった「はじまりの魂、心に宿して～四国カルスト開拓民と孫の１年～」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

副委員長	藤本　聡	（四国旅客鉄道　常務取締役）
委　　員	阿部　和孝	（松山市農業協同組合　代表理事組合長）
	金行　亜弥	（愛媛新聞社　　論説委員室委員）
	上月　康則	（徳島大学環境防災研究副センター長）
	小松　圭子	（有限会社はたやま夢楽　　代表取締役社長）
	田井ノエル	（小説家）
	前本　千恵	（三浦工業株式会社 ミウラート・ヴィレッジ（三浦美術館）学芸員）
	三木千佳子	（徳島県邦楽協会会長）
	皆見　信博	（パラ卓球選手）
	村上健太郎	（特定非営利活動法人ＮＰＯ砂浜美術館理事長）

（主な発言）

＜「はじまりの魂、心に宿して～四国カルスト開拓民と孫の１年～」
（総合　１１月１０日(金)放送）について＞

○　９４歳の黒河高茂さんが愛媛県西予市大野ヶ原を開拓した当時の苦労が紹介

され、そして孫の黒河佳紀さんが農業を引き継ぐという内容になっていて明るい気持ちになった。酪農農家が減少していると紹介されていたが、非常に厳しい経営環境であることをもう少し説明してほしかった。大野ヶ原の牧歌的な心に残る風景を守るためには、後継者不足が大きな課題となる。今回のように農業に関心を持つような番組を引き続き放送して応援してほしいと思った。終戦後の帰路で、福岡や広島の焼け野原を見て開拓を決断された高茂さんと農業を引き継ぐ孫の佳紀さんの２人に焦点が当たっていたが、その他の家族もバランスよく取り上げられていてよかった。また、声優の松本梨香さんのナレーションは心地よかった。農業は天候に左右されるだけでなく、異常気象や病害虫被害があることも紹介がされたうえで、明るい収穫作業の様子を取り上げていた点はよかった。完成度の高い番組だった。

○　高茂さんと佳紀さんの２人に焦点が絞られていて、番組に入り込みやすかった。しかし５０年農業に従事している高茂さんと就農年数が浅い佳紀さんを対比するような表現を重ねなくてもよかったのではないか。４３分の中でさまざまな伏線を回収できる単独インタビューがあり、特に高茂さんのことばには重みがあると感じた。一方で、インタビューの際に関係のない空き缶や肥料袋がアップで映されていたのが気になった。開拓地の今後について知るためには、佳紀さんの兄の尚紀さんにもう少し焦点を当てたほうがよかったのではないか。除雪車を運転していた有間孝明さんへのインタビューでは個人名のみが記載されていたが、個人的に除雪作業をしているのか、市の職員なのか分からないため肩書きがあるとよかった。大野ヶ原では道が閉ざされると、牛乳を廃棄しなければならないと聞いたことがある。道が閉ざされると困る理由についてもう少し詳しい説明があるとよかった。

○　大野ヶ原のように独自の文化がある土地で人々の暮らしや生業、自然との関わりを丁寧に記録して番組にしている点はＮＨＫの意義を感じる。内容を詰め過ぎずに余韻を感じる構成になっていてよかった。また、タイトルから高茂さんの開拓魂を知ってもらいたいという番組の意図を感じた。「国に命を捧げた仲間たちに恥じない生き方をする」というナレーションのことばは、まさに高茂さんの開拓魂を表していると思った。高茂さんの大根がなぜ１本 150 円と安いのか気になった。また、「誰かのために生きる姿」とナレーションされていたが、高茂さんが誰かのために生きている印象を受けなかったため、このこと

ばを使った意図が気になった。孫の２人が大野ヶ原に帰ってきたことに非常に驚いたが、若者がＵターンするようなたまらない魅力がこの地域にあることを実感した。今後は彼らのような若者に焦点を当てた番組を期待したい。

○　今回の番組は１年間通じての取材だったため、大野ヶ原の四季を感じることができ、自然の美しさと厳しさの両方が紹介されていて魅力的な内容だった。また、松本さんのナレーションは番組にとても合っていた。過去の映像を用いて戦後の大野ヶ原開拓の様子が紹介されていたため、その過酷さが十分に伝わった。戦争で亡くなった方の思いを引き継いでいる高茂さんの姿を見て、現在も現役で活躍している姿に納得がいった。高茂さんと佳紀さんの２人が中心だったが、家族や集落のみんなで力を合わせて生活している様子が伝わってきた。佳紀さんが大野ヶ原に戻るまでの厳しい経緯を知ると、より一層家族の温かさや仕事の尊さを感じた。過去と現在の映像を交えながら構成されていて、時のつながりを感じることができた。四国カルストという観光地の印象のあった大野ヶ原に対して、その歴史や人々の生活を知ることができる内容でよかった。自然と人に癒やされる番組だった。

○　高茂さんの強い意思は、戦時中に特攻隊に所属し、多くの先輩が命を落とすことを目の当たりにした自身の体験からきているものだと感じた。特に「自然の中で暮らすのも『人間の生き方』やないかと思います」「うちの大根は土が付いとるから買うてくれる」という高茂さんのことばには苦労した経験があるからこその重みがあった。都会で暮らした孫２人が戻ってきて、高茂さんの「もう１年ぐらい教えたら全部任せてしまおうと思います」ということばは、孫に対する高茂さんの覚悟が描かれていた。高茂さんの生きざまが困難に立ち向かう原動力として孫たちに受け継がれていく様子がうまく描かれていた。1年の長期取材で内容も濃く、家族の絆や思いなど多くの人に見てもらいたい内容だった。一方で息子の正高さんや孫の尚紀さんの酪農の話がもう少しあるとよかった。また、大野ヶ原へのアクセスについて車や鉄道で何分要するといった具体的な説明があるとよかった。

（ＮＨＫ側）

５年目の宮浦和樹ディレクターが観光客として大野ヶ原を訪れた際に、「開拓」という文字が刻まれた石碑を見つけてこ

の土地の歴史に興味を持ったことが番組のきっかけだった。ディレクターが感情移入をして一番伝えたかったのは、若者ならではの悩みを抱えた佳紀さんについてだ。さまざまな時代背景があるため２人を単純比較はできないが、高茂さんと佳紀さんの生き方は対照的だと感じ、若者に向けてどう生きていくのか伝える番組を目指した。酪農の厳しい経営環境に関しては、番組冒頭の感情移入ができてない中で、その厳しさをどこまで表現するのか非常に悩んだ。また、今後アップ映像を使う際はその意味を考えながら編集の段階で整理していきたい。除雪車の有間さんについては、市から業務委託を請け負っている開拓組合の方でもあり、集落の一人でもあり複雑なため、肩書はなくす判断になった。ほかの家族との関係性についてもっと知りたいという意見があったが、４３分尺の中で目指したのは高茂さんと佳紀さんの２人の関係性を中心に描くことだったため、時間の都合上難しかった。大野ヶ原へのアクセスについては、なるべく早く視聴者を物語に引き込みたかったため、そうした情報は載せていなかったが、今後は番組で紹介するべきか検討していきたい。

○　引き込まれる美しい高地の映像から始まり、大野ヶ原の地形がよく分かった。一方で、孫の佳紀さんと高茂さんの関係性や佳紀さんがいつから畑を手伝っているのか今一つ分からなかった。また、佳紀さんがさまざまな葛藤の末、農業を引き継ごうと思い至った経緯をもっと説明してほしかった。兄の尚紀さんの紹介はあったが、息子の正高さんとの関係性が紹介されていなかったため、不自然に感じた。地域の過酷さや厳しさの伝え方が散漫になっていたため、まとまりがなく感じた。高茂さんの紹介に戦時中の映像が使用されていて、高茂さんの精神性の裏付けになっていたと感じる一方で、高茂さんが伝えたかったことはもっと深いところにあるのではないかと思った。大野ヶ原を開拓地として選んだのは国からの指示だったのか、また開拓に対する葛藤はなかったのかもっと詳しく知りたかった。全体的に映像の美しさはすばらしく、深みのあるナレーションも番組の質を上げていた。

○　四国カルストは、景色が美しく牧歌的な印象を抱いていた。立地や地形を考

えれば、大野ヶ原で農業や酪農をするのは大変難しいことは理解できるが、観光地として行っただけでは分からないことが多いため、番組を通してその過酷さを知ることができたのはよかった。大野ヶ原を開拓した高茂さんと孫の佳紀さんに密着した番組構成はよかった。高茂さんからは戦後の混乱を生き抜き、不屈の心で土地を拓いた困難さが伝わってきた。孫への継承も人手がいるから解決というものではなく、さまざまな問題を乗り越えながら継承されるものだと感じた。農業は重労働なだけではなく、経験と知識も必要であるため試行錯誤の連続であると思う。佳紀さんが農業を始めて、「こんな大変なことしよったんだな」と高茂さんに思いをはせる場面では、当たり前のようで実際に経験しないと出てこないことばだと思った。もう一度四国カルストに行ってみたいと思う番組だった。

○　四国カルストで生きてきた先人たちの苦労や厳しい環境でも前向きに暮らす人々を知ることができた。９４歳の高茂さんの機敏な動きから「鉄人」と呼ばれる理由が理解できたと同時に、過酷な時代を生き抜いてきた先輩に尊敬の念を覚えた。「自然の中で暮らすのも『人間の生き方』やないかと思います」という高茂さんのことばは自然の脅威や厳しさを深く理解しているからこそのことばだと思った。険しい山々を超えた先に集落があることが分かるオープニングのドローン映像はよかった。集落で整備した水道設備の映像のところで、「許可を得て撮影」と補足があったが、どのような場合にこうした補足がされるのか気になった。一方でカルストについての説明がもう少しあるとよかった。さらに、昔の写真や映像をカラー化してもよかったのではないか。番組最後の今と昔の対比の写真からは、土地を切り拓いてきた人々の思いが引き継がれていることを感じることができるよいエンディングだった。

○　四国カルストは観光地として人気が高いが、壮絶な開拓の歴史については知らない人も多いと思う。今回の番組で、カルスト台地ならではの大変さを紹介したうえで、２０代の孫たちが後を継ごうと奮闘している姿を追っていて、希望の持てる内容だった。長期取材は大変だと思うが、孫を心配そうに眺める高茂さんの姿や、高茂さんへの尊敬を語る佳紀さんのことばなど、何度も取材することで見える表情や語ってくれることばがあったと思う。特に、さまざまな困難を乗り越えた大根収穫のときに、佳紀さんが「甘いにおいがする」とうれしそうに語る様子には感動した。佳紀さんは大阪に出て再びふるさとに戻って

きたいきさつを語っていたが、兄の尚紀さんについてもなぜふるさとに戻ってきたのかもう少し知りたかった。大野ヶ原は生活するには厳しい場所であると改めて実感したが、家族や周りの人々と協力して生きていくことの大切さを思い出させてくれる番組だった。

○　大野ヶ原を開拓し暮らす人々の苦難を知ってもらうという意味でよい番組だったと思う。また、松本さんのナレーションは非常に聞き取りやすく、ＢＧＭも番組の内容と合っていた。高茂さんのことばの数々は、今までの辛さや大変さの裏返しのように感じ、これまでの苦労の大きさが表現されていたと思う。戦後すぐの食糧難対策の「緊急開拓事業」の背景や入植時からの苦労の様子が説明されていたため、番組の趣旨を理解するうえで非常に役立った。一方で、２人の孫が帰ってきて自ら切り拓いた土地を引き継いでくれるという高茂さんの喜びをもう少し引き出してほしかった。佳紀さんが高茂さんを非常に尊敬していることや高茂さんが佳紀さんに対して大きな愛をもって接していることが画面を通じて伝わってきた。大野ヶ原での厳しい暮らしの中で誇りをもって生きている人々や日々の暮らしを伝えた番組で非常に評価できる。

○　全体を通して大野ヶ原の四季折々の自然があふれており、すばらしくきれいな映像だった。また、大野ヶ原の方言も相まって番組視聴後は、まるで日帰り旅行をしたような爽快感とハートフルな気分になった。９４歳まで続けてきた大根づくりを継承したい祖父と、それを引き継ぐ孫、そして家族や地域の人々などすべての登場人物から相手のことを尊重する姿勢を感じることができ、ほっこりして心地よかった。はじめは、なぜ佳紀さんが過酷な農業を引き継ぐことになったのか分からなかった。しかし、番組終盤でふるさとに戻ってきた背景が語られ、祖父への尊敬の念といった美しい動機だけではなく、波乱の人生の中でやむにやまれずたどりついた選択だったことが分かり、それこそが素顔を映すドキュメンタリー番組のだいごみであると思った。取材相手が積極的に感情を表現することは少ないと思うが、相手の内面を上手く引き出す取材ができていたと思う。

（ＮＨＫ側）

高茂さんの思いをもう少し深く掘り下げてほしかったという指摘があったが、実はディレクターが集落に溶け込み

取材相手の気持ちを引き出して、深いところまで聞くことがなかなか難しかったという背景がある。また、もう少し四国カルストの詳しい説明ができたらよかったと感じている。ナレーションを松本さんにお願いしたのは、高知県観光特使であることや大野ヶ原の雄大な自然の映像が、松本さんが声優を務めている有名なアニメを連想させたことが理由だ。水道設備に関しては、衛生上の理由からで立ち入りが厳しく制限されている。誰でも入ってよいわけではないという意味で、「許可を得て撮影」という補足を番組内に入れた。今回は改めて人の思いを伝える番組は難しいと感じた制作現場だったが、頂いた意見を参考にして、これからもよい番組を制作できるように頑張っていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　子どもとＥテレの番組を見ながら、一緒に歌を歌うことがあるが、番組内の歌すべてに字幕がついているわけではないため、わざわざ携帯で歌詞を検索している。全ての番組に歌詞の字幕をつけてほしい。本屋大賞を受賞した凪良ゆう先生の「汝、星のごとく」を読んだ。愛媛県を舞台にした作品で、愛媛県について地域の人が優しくない、偏見に満ちているという書き方をされていたように感じた。少し表現は誇張されていると思ったものの、地方であるため偏見は比較的多いのではないかという意識が根底にある。以前の「四国らしんばん」で取り上げていた地域おこし協力隊のトラブルなど、四国はマイクロアグレッションの問題が多い地域であると感じた。今後もマイクロアグレッションの話題について取り上げる機会を増やしてほしい。

○　１０月末に特別全国障害者スポーツ大会が開催されたが、香川県では大会の結団式の際に民放放送局や地元新聞社が取材で来ていた。大きなスポーツ大会であれば、結団式や選手の結果などＮＨＫも取り上げると思うが、特別全国障害者スポーツ大会も県の代表が出場する大きいイベントであるため、この大会のＮＨＫの取り上げ方については少し疑問に感じた。

○　１１月１７日に放送されたあわとく「自由を創る学び舎（や）で～徳島・起業家を育てる高専～」を視聴した。全国的に注目されている取り組みだということを実感した。番組で１回だけ取り上げるのではなく、最初の１期生が卒業するまでを追った番組を作って欲しい。先日ＮＨＫプラス登録したが、さまざまな番組が視聴できることに日々感動して過ごしている。

（ＮＨＫ側）

Ｅテレの番組に対するご指摘の点については、歌詞の字幕は必要だと思うため、早速Ｅテレに伝えたいと思う。また愛媛県に対する偏見については、現代ではマイクロアグレッションのような一方的な見方が社会全体として強くなっていると感じる。これからも番組で地域の課題を掘り起こしながら、社会を少しでも前に進めていきたいと思う。スポーツ大会については、ご指摘の点を踏まえて公平・平等に取り上げていくことを意識したい。

（ＮＨＫ側）

皆見委員のご指摘の点については、スポーツ大会ごとに個別の判断もあるため、ご指摘いただいたことは踏まえがら、今後に生かしていきたい。また、徳島県の高専の取り組みについては、全国的にも注目されているため、引き続きフォローしていきたいと思う。

ＮＨＫ松山放送局
番組審議会事務局

２０２３年１０月ＮＨＫ四国地方放送番組審議会

１０月のＮＨＫ四国地方放送番組審議会は、１６日(月)、リジェール松山において、１１人の委員が出席して開かれた。

会議では、事前に視聴してもらったドキュメント４「最後まで諦めない～高知東高校水球部～」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、１１月の番組編成、放送番組モニター報告および視聴者意向についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	三好　賢治	（伊予銀行代表取締役頭取）
副委員長	藤本　聡	（四国旅客鉄道　常務取締役）
委　　員	阿部　和孝	（松山市農業協同組合　代表理事組合長）
	金行　亜弥	（愛媛新聞社　論説委員室委員）
	上月　康則	（徳島大学環境防災研究副センター長）
	小松　圭子	（有限会社はたやま夢楽　代表取締役社長）
	田井ノエル	（小説家）
	前本　千恵	（三浦工業株式会社 ミウラート・ヴィレッジ（三浦美術館）学芸員）
	三木千佳子	（徳島県邦楽協会会長）
	皆見　信博	（パラ卓球選手）
	村上健太郎	（特定非営利活動法人ＮＰＯ砂浜美術館理事長）

（主な発言）

＜ドキュメント４「最後まで諦めない～高知東高校水球部～」
（総合　９月２９日(金)）について＞

○　水球というスポーツになじみがなかったが、高校生の部活のドキュメンタリーとして自然に楽しんで視聴することができた。初めは、ナレーションの吉川晃司さんの声のトーンと高校生の若々しさが合わないのではないかと思ったが、視聴を重ねるうちに番組の雰囲気に合っていると感じた。他校との合同チームの部員は計８人いたが、番組の中では数人の選手に焦点が絞られていたため、視聴しやすかった。人口減少の

著しい高知県で、メジャースポーツではない部活の人員確保は難しいと思うが、高知東高校水球部は昨年の全国高等学校総合体育大会で３位になったと紹介されていた。なぜ好成績を残すことができたのかについて昨年の実績をもう少し詳しく説明してほしかった。ローリー準選手の「水球は最後は気持ちなんで」ということばは練習や試合では大切なことであるが、昨今部活や運動を精神論で語ることは敬遠される傾向にあるため、このことばを番組冒頭に紹介しないほうがよかったのではないか。

○　四国に生きる人たちの心意気や生き様を描くドキュメンタリー番組として、視聴者を明るく元気づけるような内容だった。さらに、番組放送後にアジア大会の水球男子で日本が金メダルを獲得し、パリオリンピックへの出場が決まったこともあり、非常にタイムリーな内容だった。水球の競技人口が少ない高知県で日本一を目指して部員それぞれが頑張る姿に非常に好感が持てた。大会１ヶ月前の映像では、ローリー選手のキャプテンとしての悩みや森本己哲選手のけがからの復帰、攻撃の強化のために期待された森岡愛斗選手のプレッシャーなどそれぞれの悩みや苦しみの中で成長する姿を上手く描けていた。また、元水球日本代表の徳田毅監督の個性を尊重した指導も十分に伝わってきた。吉川さんのナレーションは自身も水球経験者ということで水球への思いが伝わり印象的だった。一方で昨年の高校総体で３位をとった当時の大会映像がなかったことは残念に感じた。

○　水球を通して、目標に立ち向かいながら部員個々のかっとうや成長を感じさせる内容で、大変興味深く視聴した。キャプテンのローリー選手だけでなく、森本選手や森岡選手にも焦点を当てて、それぞれの考えや思いをうまく引き出せていた点がよかった。特に高校総体の敗退後のローリー選手のことばはキャプテンとしての成長を感じた一方で、ほかの部員や監督のことばをもう少し取り上げてほしかった。森岡選手を紹介する映像でローリー選手がプールの中でスイミングキャップのひもを締めていない場面があった。休憩中かもしれないが、見方によっては競技中に正しく被っていないと誤解を生む映像であるため使用を避けるべきだった。チームで唯一高校から水球を始めた森本選手について、どのような面が評価されて主力メンバーに選ばれたのか詳しく説明してほしかった。水球のルールを知らない人も多いため、ＱＲコードなどを活用して競技ルールの紹介があるとよかった。

○　番組冒頭は伝えたいメッセージから入り、部員の学校での雰囲気から部活動に焦点を当てる流れは自然でよかった。また、吉川さんのナレーションは重みのある口調で、番組全体を引き締めていたと感じる。水球といえば吉川さんのイメージがあったため、ナレーションへの起用は納得した。２６分という時間の制約がある中、ローリー選手を含め３人の高校生をバランスよく取り上げていたと思う。個々の悩みや課題に焦点

を当てて、それぞれの人柄の紹介に持っていく流れもよかった。森岡選手と森本選手の状況はあまり深く掘り下げた紹介ではなかったが、本人の苦しさや悩みが伝わる表情を的確に捉えていて、感情移入しやすくなっていた。一方で、ローリー選手の場合は、圧倒的な強さが強調された紹介で、本人がプレッシャーに感じていないか心配になった。全体的にテンポよく、高校生の頑張りを頼もしく感じさせる内容であっという間の２６分間だった。

○　冒頭で「日本一を目指した高校生たち、そのひと夏を追った」とナレーションがあった時点で、試合に負けて日本一には届かなかったけど、ひと夏を通して頑張った部員たちの青春に焦点を当てた感動的なストーリーを期待した。しかし、実際は感動的なストーリーというよりは、キャプテンのローリー選手のレベルに合わせるために、ほかの部員たちに高いレベルの試合を要求していくというストイックでアスリート的な内容の番組だった。こうした構成は、メジャーなスポーツの誰もが知る有名選手を取り上げたドキュメンタリー番組であれば適していると思うが、今回のようにメジャーでないスポーツの高校生の部活を取り上げる場合は、適していないように感じる。強豪校の運動部は指導が厳しいことは理解できるが、選手を追い詰めているような叱りつける指導の様子は、あまり現代の部活らしさを感じることができず、あえて番組にする必要があるのかは疑問に感じた。

（ＮＨＫ側）

この番組はスポーツへの関心が高い４年目の工藤慶ディレクターが担当した。昨年、高知県で開催された高校総体で、彼が競泳の中継対応をしていた際に高知東高校の活躍を知り、その強さの秘密に関心を持った。今年は部員の人数が少なく、他校との合同チームで大会に挑まなければならない一方で、ローリー選手を含め昨年の部員が６人も残っていた。日本一を目指す中でチームの成長や高校生らしいドラマがあるのではないかと取材をすることになった。部員８人全員を取材したうえでローリー選手・森本選手・森岡選手の変化や成長が描けそうだと実感し３人に軸を絞ることとした。高校生への取材は距離を縮めつつ適切な距離感で取材を進めていくことに苦労した。プールの中ではローリー選手の圧倒的な強さが目立ってしまうため、ふだん仲のよい和気あいあいとしている場面をもう少しロケをして描けたらよかった。ナレーションの吉川さんは番組に対して非常に愛情を持って接してくださり、声のトーンは吉川さんが事前に考えてくださったものをベースにしている。テンポの速いスポーツドキュメンタリー番組の中で、吉川さんのナレーションが

落ち着きを与えてくれていた。

○　水球はふだん見る機会が少ないため、番組を通してその迫力や魅力を知ることができた。ローリー選手・森本選手・森岡選手の３人に焦点を絞って展開していて、最後まで諦めずにチームとして互いに高め合って成長したことを感じた。一方で競技人口が少ない水球というスポーツを部員たちが選んだきっかけを紹介してほしかった。水球の競技中のスローの映像は速さと力強さを実感できた一方で、ローリー選手のシュートはゴール裏から撮るなどゴールキーパーの視点の映像があるとより速さや迫力を実感できたと思う。水球の競技に関する説明は簡潔で分かりやすく、それぞれの選手の役割を把握することができた。地域の話題は関心度が高く、半年かけての番組制作をしているため、非常に見応えがあってよかった。札幌市で開催された高校総体の映像があったが、番組の担当ディレクターがチームに同行するのか、その地域局のディレクターが同行するのか気になった。

○　高校生の部活という青春の 1 コマにドラマ性があって、胸が熱くなる番組だった。水球といえば吉川さんのイメージがあるため、今回のナレーションはすばらしい人選だと思った。野球やサッカーなどは注目度が高いため関連した番組が多いが、メジャースポーツではない水球にスポットを当てていたのがよかった。一方で、水球の競技のルールについての説明がもう少しあるとよかった。これまで自分の力を伸ばすことだけを考えていたローリー選手が、仲間と日本一になるために、キャプテンとして足りない部分があると自分を見つめ直すところが印象的だった。結果を出さないといけない使命感から自信を持てずにいた森岡選手が、自分の役割に気づいて変化していく様子もうまく描けていた。勝利を目指すだけでなく、その中でどう成長していくかという部活ならではのスポーツの清々しさを感じることができた。今後は水球にも注目しつつ、ローリー選手の活躍に期待したい。

○　ローリー選手のような強い選手はスポーツ推薦で強豪校に行くこともできると思うが、地元の高校の部活で小さい頃から同じクラブチームで成長してきた仲間たちと頑張っているのは驚いた。ＮＨＫがローリー選手を見つけて彼に焦点を当てた番組を制作した点は評価できる。ローリー選手は高校総体の試合で相手チームに圧倒的な点差をつけられても部員に声をかけ最後まで諦めずにプレーをしていて、番組タイトルにつながっていると思った。試合は負けてしまったが、こうした挫折も次につなげるという締めくくりで、勇気づけられる番組だった。一方で、部員それぞれの技術的な特徴の紹介と実際の試合でその特徴を活かすことができなかった要因の説明があれば、より水球の魅力を理解できて楽しめたと思う。水球は「水中の格闘技」とも言われているが、足の動きや選手どうしの絡み合いなど水中からの映像でもその迫力をもっと

見たかった。今後も四国の若者の活躍に焦点を当てた番組を期待したい。

○　タイトルから熱い内容の番組だと思ったが、穏やかなナレーションで高校生の日常を切り取ったしみじみした内容だった。３人の選手に焦点を絞り、それぞれの役割を示したことで水球のルールを知らなくても番組を楽しむことができた。選手のインタビューが前半にもあると、より３人を認識しやすくなったのではないかと思う。一方で、ほかの部員に対しても１人ずつ紹介があり、丁寧でよかった。部員どうしで手を差し伸べたり、声をかけたりといった細かいコミュニケーションもしっかり番組で取り上げていたのがよかった。森岡選手の家庭での様子から人柄をよく知ることができ、その後の展開で感情移入しやすくなった。最後の試合でローリー選手の声かけに応じて、それぞれが頑張った部分に焦点を当てていて演出を盛り上げていたのがよかった。引退直前の部員の楽しそうな様子まで取材していて、選手たちの今後の人生を想像させる終わり方だった。

○　吉川さんをナレーションに起用したことに好感を持てた。地方の公立高校の生徒が、高校総体を勝ち抜くために奮闘する姿を取り上げていたのがよかった。高知東高校は昨年と比較して、非常に厳しい状況からのスタートだったということを強調したほうが、番組のタイトルに結びついたと思う。また、番組冒頭に「日本一を目指して」というナレーションがあったが、番組が進むにつれその目標はハードルが高いと感じた。チームの目標は別の言葉で表現するほうがよかったのではないか。ローリー選手を中心にチーム一丸となって勝利に向かう姿勢や彼らの表情に共感できた。番組最後に部員全員が笑顔で自撮りしているシーンでは、やり切ったという彼らの思いが表現されていて非常によかった。ローリー選手の「水球は最後は気持ちなんで」ということばは精神論のように捉えられてしまうため、気持ち以外に彼らの粘り強さや冷静さといった切り口で番組を展開してもよかったのではないか。

○　「最後まで諦めない」というテーマにそって、必死でチームの課題を乗り越えようとする高校生の姿がすがすがしく、爽やかな印象をもたらしてくれた。試合の結果にはつながらなかったが、最後部員の笑顔で締めていたエンディングがよかった。なぜこのチームを取材したのかが番組の冒頭で描かれていれば、番組を視聴する角度も変わっていたと思う。１０月６日（金）放送のドキュメント４「世界の頂に吹く“風”になれ～プロサーファー　上山キアヌ久里朱」では、最初に選手の実績の説明があり、その後の流れが分かりやすかったため、当番組も同様の取り上げ方がよかったと感じた。番組のナレーションに吉川さんを起用したことがすばらしい人選だった。吉川さんが昔水球をしていたことを知らない人も多いと思うため、略歴を紹介するテロップ

を出すなどの工夫があれば、吉川さんを起用した番組制作側の熱意が視聴者にも伝わったと思う。

（ＮＨＫ側）

水球は水中で競技が行われるため、競技している様子を映像化することが非常に難しかった。また、部員についてもスイミングキャップをかぶっていて同じような体格であるため、どうやって区別させるかについても悩んだ。昨年の高校総体の試合映像の確保が難しく、昨年の実績の紹介が不十分になってしまった。水中を撮影できるカメラやハイスピードカメラを用いて取材を行ったため、シュートを打つときに水滴が飛び散る様子など競技中の迫力のある映像を撮り、水球が「水中の格闘技」と言われるゆえんを表現できたと思う。今年の高校総体は担当の工藤ディレクターが高知から同行した。試合の映像はウェブ中継の映像を購入したが、画質が悪く番組の中でなかなか使用ができなかった。番組の中で吉川さんと水球の関わりを紹介することはできなかったが、事前に「こうちいちばん」やＳＮＳなどで告知したことで非常に反響が大きかった。さらにＮＨＫプラスの再生回数が通常に比べて大きく伸びたため、事前告知の効果ではないかと思う。

＜放送番組一般について＞

○　９月２８日（木）に放送された夜ドラ「わたしの一番最悪なともだち」の中で、キャップ型のヘルメットを被って自転車をこいでいるシーンがあった。キャップ型のヘルメットの認知度がまだ低いことを考えると、視聴者の中には普通のキャップと捉えた人がいるかもしれないと感じた。もう一つは、１０月９日（月）に津波注意報が発表された際に、ニュースの中でどこに津波が来るのかという情報は継続的に流れていたが、どこで津波が起きたのかという情報がなかった。途中から放送を見る視聴者に考慮して、どこで津波が起きたのかという情報は常に発信したほうがいいと感じた。

○　気候変動などの内容を地方番組でも取り上げてもらいたい。以前、ＮＨＫスペシャル「２０２３　未来への分岐点」シリーズを視聴したことがあるが、地球規模のような大きな物事もひと事ではないと実感した。特に今年は、台風や波の影響でホエールウォッチングが開催できなかったり、毎年Ｔシャツアート展を開催している砂浜で展示のしかたを変えたりと、環境の変化に気付く機会が多かった。自分たちの行動です

ぐに変わることではないと思うが、すでに四国で活動していることがあれば、その取り組みを番組で紹介し、視聴者の目に触れる機会を増やしてほしい。

○　１０月１３日（金）放送の四国らしんばん「四国で働くシン時代」を視聴した。四国の働き手不足について取り上げており、非常に興味深く視聴した。今までの四国らしんばんの発想とは異なり、社会問題など四国に住む自分たちに直接関わりのある話題が取り上げられていた。今後もこうした番組やテーマを積極的に取り上げてほしい。

（ＮＨＫ側）

津波注意報については、情報の出し方についてさまざまな課題があると認識している。また、地域課題に直面するような社会性のあるテーマについては積極的に取り上げていきたいと考えている。今回頂いた意見は今後の番組作りに活かしていきたい。

ＮＨＫ松山放送局
番組審議会事務局

２０２３年９月ＮＨＫ四国地方放送番組審議会

９月のＮＨＫ四国地方放送番組審議会は、１１日(月)、リジェール松山において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、事前に視聴してもらった四国らしんばん「四国アップデート委員会　夏休みだよ若者集合！」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、１０月の番組編成、放送番組モニター報告および視聴者意向についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	三好　賢治	（伊予銀行代表取締役頭取）
副委員長	藤本　聡	（四国旅客鉄道 常務取締役）
委　　員	阿部　和孝	（松山市農業協同組合 代表理事組合長）
	金行　亜弥	（愛媛新聞社　論説委員室委員）
	上月　康則	（徳島大学環境防災研究副センター長）
	田井ノエル	（小説家）
	前本　千恵	（三浦工業株式会社 ミウラート・ヴィレッジ（三浦美術館）学芸員）
	三木千佳子	（徳島県邦楽協会会長）
	皆見　信博	（パラ卓球選手）
	村上健太郎	（特定非営利活動法人ＮＰＯ砂浜美術館理事長）

（主な発言）

＜四国らしんばん「四国アップデート委員会　夏休みだよ若者集合！」
（総合　８月４日(金)）について＞

○　「マイクロアグレッション」ということばの意味を丁寧に説明していてよかったが、番組の中では「無自覚の偏見」などより分かりやすい表現に置き換えて説明したほうがよいと思った。ゲストのジョーンズ菜希亜さんのＶＴＲは、無自覚に人を傷つけてしまうことがよく伝わる内容だった。難しく深刻なテーマだったが、ガリベンズ矢野さんがスタジオの雰囲気を和ませていたのはよかった。さまざまな「マイクロアグレッション」の体験談が紹介されていたが、社会的マイノリティーに対する偏見と若者

に対する偏見は分けて考えるべきだと思った。同じ問題のように捉えてしまうと、社会的マイノリティーに対する配慮のハードルを上げてしまったり、反対に問題への軽視につながったりするのではないか。２６分尺ではゲストの大学生２０名全員を生かせていなかったように感じる。ゲストの半数は年齢の高い世代を集めて、両者が討論するような内容にすればより相互理解が深まったと思う。

○　２６分尺にしてはゲストの人数が多く話題が散漫になっていたため、全体的に締まりがない印象を受けた。前半は外国にルーツを持つ２人の話題を中心にトークが展開されていたが、トランスジェンダーの福井瑞穂さんには焦点が当たらなかったため、ゲストの取り上げ方に差があると感じた。外国にルーツを持つ方が２人、トランスジェンダーの方が１人というゲストのバランスもよくないと思った。また、街頭インタビューで出た話は身近によく起こる一般的なエピソードだったため、ゲストが話す社会的マイノリティーに対する「マイクロアグレッション」の体験談とは本質的に異なっていると思った。後半で漫画家の星野ルネさんの漫画が紹介されていたが、前半にジョーンズさんが話した体験談と内容が重複していたため、別の話題に移るなど臨機応変に対応するべきだった。番組テーマは時事を反映させていてよいため、今後は焦点を絞ってより深く掘り下げた内容を期待したい。

○　「マイクロアグレッション」は、無意識の思い込みによる偏見や固定観念から発せられることばであると認識した。大学生の体験談を聞いて、「若いのに」「男性（女性）なのに」などの枕詞をなくしていくことが第一歩だと感じた。番組を通して、どのようなことばで当事者が傷つくのかという点は理解できたが、仲よくなるためにはどのような声かけをするべきなのか分からなかったため、当事者に聞いてほしかった。外国にルーツを持つゲスト２人の話題が中心だったため、トランスジェンダーの福井さんがいたにもかかわらず、ＬＧＢＴＱの方々が抱える問題が中途半端になってしまった印象だ。アップデート提言として「お互いに伝え合える環境を整えていく」と紹介していたが、ＬＧＢＴＱの方々は性的指向や性自認を公表することさえできない方が多い。その点を踏まえると「伝え合う」という結論にひとくくりにはできないと感じた。今後はより焦点を絞った番組を期待したい。

○　エイブルみちるディレクターによる「マイクロアグレッション」の説明はよかったが、冒頭に入れたほうがより番組の内容を理解しやすかったと思う。また、多様性への認知度や理解についての説明では、大都市圏の数字と比較するのではなく、四国４県と似た都道府県の数字と比較をしたほうがより分かりやすかったと思う。松山局の永井伸一アナウンサーが大学生２０名に対し「マイクロアグレッション」について尋ねた時、ほぼ全員が知らない様子だった。同じ境遇の大学生がゲストとして２０名も

必要だったのかは疑問に感じる。オープニングでガリベンズ矢野さんがくりーむしちゅーの上田晋也さんのものまねをする演出があったが、番組のテーマからすると適切ではないと感じた。「まずは知ることから始める」と言ったガリベンズ矢野さんのコメントは、番組のまとめとして視聴者に寄り添ったよいことばだった。今後は障害者に対する偏見や差別などの問題も取り上げてほしい。

○　番組を通して、無意識の偏見や思い込みがことばや態度に表れて意図せず当事者を傷つけてしまい、その積み重ねが人権侵害に発展する可能性を知った。また、「マイクロアグレッション」は発言する側の悪意がないことが多いが、確実に当事者の心にダメージを与えており、さまざまな社会問題の下地になることに気付かされた。感受性豊かな若い世代に知ってほしい内容であるとともに、年齢の高い世代にも必要な知識であるため幅広い世代で関心の高いテーマだったと感じる。エイブルディレクターの説明は分かりやすく、日常を振り返りことばの重要性を再認識するきっかけとなった。２６分の生放送をうまくまとめていた一方で、一言ずつでもできるだけ多く大学生の意見を紹介してほしかった。また、副題から楽しい雰囲気の番組を想像したが、今回はシリアスなテーマだったため、番組の内容と適していないように感じた。

（ＮＨＫ側）

今回の「四国らしんばん」は、エイブルディレクターの体験談をもとに番組を企画した。アメリカ人の父を持つ彼女は、高松局に赴任したことで「マイクロアグレッション」を感じる頻度が増えたと実感したそうだ。そこで調べてみると、四国における多様性の理解度は全国でも最低レベルだという調査結果が出たため、四国に住む視聴者の方と一緒にこの問題について考える番組を制作できないかと思い、提案するに至った。ただ「マイクロアグレッション」という概念自体、日本では認知度が低く研究も始まったばかりであるため、まずは知ってもらうということを大事にした。８月の夏休みという時期を利用し、四国の未来を担っていく若者たちと一緒に考えていきたいという意図で、スタジオには大学生２０名をゲストとして迎えることになった。テーマを絞ったほうがよいのではないかという意見があったが、「マイクロアグレッション」は偏見や固定観念から起こりうる身近な問題であるということを認識してもらいたかったため、社会的マイノリティーの方だけでなく、大学生や街頭インタビューの体験談や意見も交える構成にした。

○　「マイクロアグレッション」ということばを初めて聞いた。聞き慣れないことばで

あるため、「心を傷つけるあなたの小さなことば」など分かりやすい表現に置き換えたほうが、より多くの人に興味を持って視聴してもらえたのではないかと思う。また、副題についてももう少し番組の内容が分かる表現があるとよかった。大学生やゲストに体験談を話してもらうことで、視聴者に自分事として捉えてもらうことができたと思う一方で、討論という形式になっていなかったのは残念に感じた。選んだテーマはよいと思うが、これまでの「四国らしんばん」と同様に今回も放送尺に対して話題を詰め込みすぎていると感じた。「マイクロアグレッション」を意識して、丁寧に付き合ったりお互いに話し合ったりということは大切であるが、気を遣いすぎてしまうことで気の置けない人だけで付き合ってしまい、コミュニティーが細分化や分断につながってしまう可能性もあるのではないかと感じた。

○　「マイクロアグレッション」について若者たちと討論するという内容だったが、このテーマは若者だけでなく年齢の高い世代にも必要な知識であると感じた。ゲストの体験談などの実例や星野さんの漫画の紹介があることで、「マイクロアグレッション」について理解しやすい構成だった。一方で「マイクロアグレッション」の被害を受けた体験談のみ取り上げられていたため、時代の生きにくさを感じて気持ちがへこんでしまった。また、アップデート提言では「お互いに伝え合える環境を整えていく」とあったが、まずはコミュニケーションを取ってお互いを知ることから始まるため、どのようなことばだったら傷つけずに話しかけることができるのか具体例を考える時間があるとよかった。四国は大都市圏と比べて「マイクロアグレッション」の問題に直面して対処する場面が少ないと感じる。今後は四国で暮らす私たちがどうしたらこの問題を対処できるようになるかという視点からも番組制作をしてほしい。

○　「マイクロアグレッション」を意識しすぎるとコミュニケーション自体が困難になってしまうと感じたため、番組終盤のアップデート提言についてはもう少し時間を割いて議論してほしかった。大学生２０名がゲストとして参加していたが、グループごとに分けて討論するなど副題にもある「委員会」としての雰囲気や若者が一緒に考えている演出があるとよかった。番組を通して、自分自身がアップデートしていくだけでなく、周りの人とアップデートしていける関係性を構築していく重要性を感じた。四国ではほかの地域に比べて多様な人が集まるコミュニティーが少なく、人口減少や少子高齢化によりさらにその機会が減少していくと考えられる。この問題について四国で暮らす私たちはどのようにアップデートしていくべきなのか考えさせられる番組だった。また、当事者でもあるエイブルディレクターの思いや制作意図を、ＱＲコードを通してＷＥＢ記事で知ることができたのはよかった。

○　「マイクロアグレッション」という聞き慣れないことばが出てきたため、初めは番組のテーマに興味を持てなかった。しかし、身近な事例や体験談を取り上げて説明していたことで、自分事として捉えることができる内容になっていた。また、星野さんの漫画の紹介は具体例が視覚的にも分かりやすくて、「マイクロアグレッション」を理解するのに役立った。番組では大学生を中心に意見を聞いていたが、近年若い世代は比較的に多様性について理解があり、柔軟に対応できているように感じる。今回のテーマでアップデートしていかなければならないのは、若い世代よりも年齢の高い世代のほうだと感じた。さらに、この問題は四国だけでなく日本全国共通の課題であるため、地域別の視点というよりは年齢層別の視点を切り口に議論を展開するほうがよかったのではないか。また、放送時間の関係でアップデート提言についての議論やまとめがやや雑になっていたのは残念だ。

○　「マイクロアグレッション」はセンシティブで敬遠しがちなテーマだと思うが、身近な事例を取り上げて説明していたため、ことばの意味を知らない人にも理解しやすい構成になっていた。今回の番組は社会的マイノリティーの問題に関して、当事者であるゲストたちと大学生２０名が自由かったつに議論していく内容だった。社会的マイノリティーを取り上げた番組をゴールデンタイムに放送できているという事実からも、社会全体に多様性を重んじる意識が浸透してきていることを再認識した。大都市圏に比べて四国は多様性に対する意識が比較的低いと言われている。今回のテーマを２６分の放送尺で議論を深めていくことは難しいと感じたが、番組で問題提起することで視聴者の意識改革につなげていくことは非常に効果的だと思う。今回のテーマに限らず、考え方が保守的だといわれる地方に住む人々の意識をアップデートしていくためにはどうしたらよいのかについて、今後もＮＨＫで積極的に取り上げて議論してほしい。

○　「マイクロアグレッション」は聞き慣れないことばであるため、分かりやすい日本語への言い換えや詳しい説明が番組冒頭にあるとよかった。さまざまな事例の紹介をするために、当事者である３名と大学生２０名のゲスト、さらに街頭インタビューなど幅広く情報提供をしていたが、２６分尺にしては情報量が多く、問題の拾い上げと事例の紹介で終わってしまった。発言者の意図していないところで受け取り側が傷つくことは理解できたが、それを防ぐにはどうしたらよいのか分からなかった。また、関係性を構築するための第一歩として初対面でコミュニケーションを取る際は何に気をつけたらよいのかなど具体的な提言がなかったため、もの足りなさを感じた。若い世代は学校やふだんの生活で多様性に触れる機会が多くなっていると感じる。今回は若者だけでなく、年齢の高い視聴者にもこの問題を認識してもらうような番組構成に

したほうがよかったと感じる。

（ＮＨＫ側）

「マイクロアグレッション」という難しいテーマの番組を２６分という短い放送尺で制作することは非常に苦労した。「マイクロアグレッション」は多くの人に自分事として捉えてもらいたい問題だったため、外国にルーツを持つ方の視点に絞って議論するのではなく、ＬＧＢＴＱの方や学生も含めてさまざまな立場の視点も交えて問題を取り上げることとなり、情報量が多くなってしまった。一方で、ご指摘の通りＬＧＢＴＱの方の問題はもう少し踏み込んで取り上げるべきだったと感じる。総じてバランスよくテーマを絞り、一つ一つをより丁寧に取り上げる必要があったと感じる。「マイクロアグレッション」を起こさないための対処法について当事者たちに話を聞かなかった理由は、ゲストの方の体験談や意見を聞いて、参加する大学生が自分たちで考えたことや感じたことを大事にしてほしいと思ったからだ。一方で視聴者には、具体的にどのように対処していけばよいのかという点に踏み込んで伝えられなかったと反省している。今後は尺に合わせてテーマを絞ったり、長尺の番組を目指したりなど制作の初期段階で番組の構成についてしっかり議論していきたい。

＜放送番組一般について＞

○　「ひめポン！」などで、思い出などを額装する額装師が過去に取り上げられていた。地方では県外から移住してきて作家活動をしている人に対して、地元の方からの視線が厳しいことが多い。彼らの活動をＮＨＫなどのテレビ番組で取り上げることで、周囲から理解されてその地域での生活のしやすさにつながると思う。今後もＮＨＫでは、同じような境遇で活動している人を積極的に取り上げてほしい。

○　来年のパラリンピックに向けて、視聴者へ障害の見える化を進めてもらいたい。出場選手の障害の程度ついて詳しい説明があると、よりパラ競技に興味を持ってもらえるのではないかと思う。パラ競技は、同じクラスに所属する選手でも障害の程度に差があり、明らかに相手選手が有利になることがある。出場選手の障害の程度を詳しく説明することで、勝敗に大きな差が出ている要因が視聴者にも理解しやすくなるのではないか。また、野球やラグビーなどの多くの人が視聴するスポーツ中継では、ルー

ルをあまり知らない人に対しても、字幕やＱＲコードを活用してより分かりやすい情報発信を心がけてほしい。さらに、活躍している選手を番組で取り上げる場合、その人気に焦点を当てるのではなく、その選手の技や競技の専門用語の意味など競技そのものの情報を純粋に伝えてほしい。

ＮＨＫ松山放送局
番組審議会事務局

２０２３年７月ＮＨＫ四国地方放送番組審議会

７月のＮＨＫ四国地方放送番組審議会は、２４日(月)、リジェール松山において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、２０２３年度後半期の国内放送番組の編成について説明があり、２０２４年度の番組改定とあわせて意見の交換を行った。続いて、事前に視聴してもらった四国らしんばん スペシャル「教訓は生かされるのか　～西日本豪雨から５年～」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、８・９月の番組編成、放送番組モニター報告および視聴者意向についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	半井　真司	（四国旅客鉄道 取締役会長）
委　　員	阿部　和孝	（松山市農業協同組合 代表理事組合長）
	金行　亜弥	（愛媛新聞社　論説委員室委員）
	上月　康則	（徳島大学環境防災研究副センター長）
	小松　圭子	（有限会社はたやま夢楽　代表取締役社長）
	田井ノエル	（小説家）
	前本　千恵	（三浦工業株式会社 ミウラート・ヴィレッジ（三浦美術館）学芸員）
	三木千佳子	（徳島県邦楽協会会長）
	皆見　信博	（パラ卓球選手）
	村上健太郎	（特定非営利活動法人ＮＰＯ砂浜美術館理事長）

（主な発言）

＜「２０２３年度後半期の国内放送番組の編成」および
「２０２４年度の番組改定」について＞

○　昨今、性的マイノリティーに関する報道を多く見る一方で、障害者に関する報道が以前に比べ著しく減っていると感じる。例えば、多目的トイレや障害者等用駐車場をそこまで必要のない方が利用するといった問題もある。今後はそうしたことも取り上げてほしい。

○　大河ドラマ『光る君へ』は女性が主人公であるため、放送をとても楽しみにしている。

○　2020 年１２月１１日(金)の「小豆島に移住してみた！」（総合 後 7:30～7:55 四国ﾌﾞﾛｯｸ）という高松局制作のドラマがあったが、ドラマの舞台に四国を取り上げ、地域をアピールすることは非常に効果的だと感じる。地域活性化という観点で、地域を舞台にしたドラマを今後も期待している。また、動画配信サービスで愛媛が舞台のドラマが話題となっているものがあるが、そういったコンテンツを購入して放送することはできないのか。

○　今後も、ＮＨＫプラスは放送受信契約をしていれば追加の費用を請求されることなく利用できるのか。有料になることはないのか知りたい。また、ＮＨＫプラスへの登録方法が難しいと感じる。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫプラスは、放送受信契約のある世帯の方は追加の負担なく使用できる。受信料を財源とする放送を補完するサービスの一環である。

○　ＡＩアナウンサーがニュースを伝えていることに違和感を覚える。ＡＩアナウンサーの導入は何を目的におこなっているのか知りたい。導入するにあたってＮＨＫで議論していることをもっと説明するべきだ。また、伝えたいことが本当に視聴者に伝わっているかについても気になる。

（ＮＨＫ側）

業務の効率化などを目的に、ＡＩアナウンサーを導入している。ＡＩアナウンサーは現在もさまざまなデータを集めて、抑揚などの改善を図っている。通常のニュース原稿を読むことに関して言えば、本物のアナウンサーに近いレベルになると思う。一方で、アナウンサーがいなくなることを目指している訳ではない。情報を正確に伝えるために何ができるのか、いろいろと取り組んでいるところである。

○　私もＡＩアナウンサーには違和感を覚えるが、人口減少の進む社会にはそうした技術の活用も必要になってくると思う。より技術を向上させて、性能のよいＡＩアナウンサーを期待したい。また、四国は、ほかの地域よりも早いスピードで人口減少が進んで

いるが、それに対する取り組みを積極的に行っている地域でもある。そうした取り組みをきめ細かく取材し、全国に発信してほしい。さらに、観光の面では、大都市の観光地のオーバーツーリズムが問題になっている。四国などの地方は、来日５、６回目で旅先として選ばれるということを聞いたことがあるが、地方の魅力を積極的に海外に発信することで、地方にも海外観光客が多く訪れるきっかけになることを期待している。

＜四国らしんばん スペシャル「教訓は生かされるのか　～西日本豪雨から５年～」
（総合　７月７日(金)）について＞

○　大雨の多いこの時期に西日本豪雨関連の番組を生放送したことは、臨場感や緊張感を感じることができてよかった。冒頭で愛媛大学防災情報研究センターの森脇亮教授を紹介するテロップに誤りがあり、松山局の永井伸一アナウンサーが訂正していたが、どの部分に誤りがあったかわからなかった。また、ＮＨＫの全国ハザードマップを読み取るＱＲコードが紹介されたが、実際に読み取って使い方を確認しているうちに番組が進行しまった。後半で操作方法の詳しい説明があったが、前半でそのことを教えてほしかった。四国には情報機器を使わない世代も多いため、情報弱者に対する情報伝達の課題についても取り上げてほしかった。ダムの緊急放流については、情報発信する側と受け取る住民側の両方の意見が触れられていてよかった。昨今、急激に気象状況が変化することが多く、視聴者から提供された映像や写真を活用した情報発信がさらに重要になってくることを実感した。

○　４４分の長尺だったが、展開が複数あり学びの多い番組だった。ゲストのタレントのみかんさんは県民に近い目線で的確な発言をしていた。野口琢矢気象予報士が四国の約８割の地域で、土砂災害やがけ崩れが発生しやすいと説明していて、被災経験がない人も避難への関心を高めてほしいと感じた。愛媛県大洲市の特別養護老人ホームで職員が裏山の異変に気づき、安全な場所に避難していたという話では、入所者や地域の方から崩落の危険性などを事前に伝承されていたのか気になった。緊急放流の可能性がある４２のダムのうち、３９のダムは住民を交えた訓練をしていないという説明があったが、その原因を知りたかった。また、ダムの放流の情報発信では危険性を想像しづらいという住民の指摘があり、より理解しやすい情報提供や説明が専門家に求められると感じた。愛媛県宇和島市吉田町からの中継映像は、なかなか定まらなかったため残念に感じた。

○　四国で起こった大きな自然災害を身近に感じることができる番組だった。ことし４月に避難指示が解除された徳島県三好市粟山地区では、かつて暮らしていた１７世帯

のほとんどが戻ってきていない。その現状を語る粟山地区自治会長の喜多二三男さんのことばには、５年の月日の重さを感じた。大洲市の特別養護老人ホームでは職員が裏山の異変に気づき、事前に入所者を安全な場所に避難させていたという話は、視聴者にも気づきを与えたと思う。番組内でＱＲコードを紹介したのはよいと思ったが、慣れていないとＱＲコードを読み取ることが難しいと感じた。もう少し説明や表示時間を長くしてほしかった。ゲストのみかんさんが「Ｖを見て」ということばを使用していたが、表現として適切でないと感じた。今回のように、四国で実際に起こった自然災害の映像を番組で取り上げることで、自然災害が少ない地域でも、災害に対する危機感をより身近に感じることができたと思う。

○　永井アナウンサーの進行は番組内容を理解する手助けになっていた。また、ハザードマップを確認できるＱＲコードを大きく表示し、実際の画面で操作方法を説明していた点はよかった。一方で、実際にアクセスすると同意画面のようなものが表示されて、慣れてないと難しく感じるため、より丁寧な説明が必要だった。ＮＨＫの全国ハザードマップと気象庁のキキクルを紹介していたが、他にもさまざまな情報ツールがある中で、その２つを選んで紹介している理由がわからなかった。２つの特徴やおすすめのポイントの説明があると使用する動機につながったと思う。放送の数日前に大雨が降っていたため、その時のキキクルの画面を紹介していればよりわかりやすかった。話題を厳選してもう少し一つ一つを丁寧に紹介するべきだと感じた。ダムの緊急放流については情報を発信する側と住民側の両者を取材してよかったが、住民の意見を受けてダム関係者はどのように発信の在り方を改善していこうと考えているのか気になった。

○　西日本豪雨から５年たち、目に見えるかたちで復興が進むと災害がひと事のようになってしまい、災害の風化が大きな課題になっていると感じる。今回は西日本豪雨の教訓をどう生かすかということに焦点を当てて、視聴者に再び災害に対する問題意識を持たせる内容だった。吉田町の中継は臨場感が感じられてよかった。土砂災害の予兆を捉える地表面傾斜計の活用することで科学的根拠を基に避難指示を出すことができれば住民の避難行動につながるため、今後に期待したい。肱川ダム統合管理事務所の清水敦司所長の「『伝える』ということと『伝わった』というところに差があった」という話が印象的で、西日本豪雨の教訓としなければならない課題だと思った。警戒レベル１から５の色分けと、キキクルの雨の降り方の色をリンクさせているという解説では、実際の画面があればより説得力が増したと思う。ゲストのみかんさん、森脇教授、野口気象予報士は、それぞれの立場で適切にコメントしていて理解や共感につながった。

（ＮＨＫ側）

西日本豪雨から５年をどのように捉えるかについては番組制作にあたって議論した。５月２８日に開催した第７回愛媛防災シンポジウムで永井アナウンサーと森脇教授が一緒に議論したことも番組のベースとなっている。森脇教授は豪雨から５年経過したとはいえ、新型コロナウイルスの流行によって止まってしまった時間を考えると、豪雨の教訓や対策はこれからだと話していた。松山局としては「四国らしんばん」だけでなく、愛媛県向け夕方６時台の「ひめポン！」というニュース番組でも、連日西日本豪雨特集を放送した。さらに翌週１４日には愛媛県向けの「出張ひめＤＯＮ！」という被災地や被災者を応援する番組もあり、この３つの役割分担も議論を重ねた。「四国らしんばん」では「ひめポン！」と連携しながら、西日本豪雨の課題や自治体の取り組みに注視して伝えることを意識した。今回「教訓は生かされるのか」をテーマに取材した結果、どの取材現場もまだ歩みの途中であるということを実感した。同時に今後取材するべき項目が明らかになったように感じる。森脇教授の肩書のテロップの誤りについて、永井アナウンサーが口頭で訂正したあとは正しいテロップを表示するようにしていたが、もう少し丁寧な説明が必要だった。

○　これまでの「四国らしんばん」ではＱＲコードが画面に小さく表示されていて、読み取ろうという気持ちにならなかった。しかし今回は大きく画面に表示し、読み取った先の画面を確認しながら操作ができたため、実際にＱＲコードを読み取る動機になり、非常に効果的な演出だったと思う。野口気象予報士が土砂災害の前兆を紹介している場面では、前兆がみられる前に避難情報や警報が出ているはずだから、情報を確認して避難してほしいといった重要な補足もあり、適切な情報の受け取り方が丁寧に解説されていた。ハザードマップの見方やＡＲにより浸水映像、警戒レベルの解説は危険性をイメージしやすくてよかった。吉田町の中継では、被災された方が道路や建物はきれいになったが、雨が降ったら怖くなると話していたことが印象的で、災害に対する意識を日頃から持つ重要性を強く感じた。一方で今回はスペシャル番組だったため、ふだんの「四国らしんばん」とは違う一面を見たかった。

○　全国各地で豪雨災害が起きている時期の放送だったため、いつどこで自然災害が起こってもおかしくないという気持ちで視聴した。大洲市の特別養護老人ホームの話は山あいの自然豊かな場所に位置しているということは、同時に災害面では注意が必要であることを実感した。他の施設においても、同様の対策ができることが視聴者にも

伝わったと思う。土砂災害の前兆を地表面傾斜計で予測できる技術を初めて知り、早く実現してほしいと思った。「危ないタイミングに危ない場所にいないこと」という森脇教授のことばは非常に説得力があった。ダムの緊急放流の話では、情報を発信する側と受け取る住民側の差をなくすことの重要性を感じた。吉田町からの中継は番組全体が引き締まり、視聴者の防災意識も高まったと思う。番組を通して、西日本豪雨当時の教訓を記憶に留めておく重要性を実感し、今後起きる自然災害の被害が少しでも小さくなればよいと思った。

○　災害から月日がたってしまうと、どうしても被災地や防災について考えることを忘れてしまう。今回の番組はタイトルや内容から西日本豪雨の教訓を次に生かしてほしいという願いを込められていたと感じる。ゲストのみかんさんが「復興は時間がかかる、傷跡は残る」と言っていたが、簡潔なことばで大切ななことを伝えてくれていたと思う。さらに地方に行けば行くほど、復興には時間がかかることを改めて実感した。事前に備えることでいかに被害を最小限にして命を守ることにつながるかを視聴者が受け止めやすく説明していた。ＱＲコードが大きく画面に表示されたことで、番組をきっかけに多くの人がハザードマップを確認しやすい流れを作っていたと思う。吉田町から追悼の催しを中継で伝えることで、西日本豪雨が５年前に起きたという現実を改めて実感させられた。この番組を通して日頃から災害への危機意識を高く持つ大切さを強く感じた。

○　栗山地区のように過疎化が進んだ地域では西日本豪雨やその後の新型コロナウイルスの流行で、この５年の時間が一気に失われてしまった。５年たっても１７世帯が戻ってきていないということは、非常に無念である。番組では四国は急傾斜地が多く土砂災害のリスクが高いことを指摘していてよかった。ふだん暮らしている土地に対しては危機意識がまひしてしまうため、リスクと対策については伝え続けることが大切だと思う。大洲市の特別養護老人ホームで入所者を事前に避難させていた成功事例を番組で取り上げて議論していたのはよかった。土砂災害の前兆を地表面傾斜計で予測できる技術は完全ではないと感じるため、あまり頼り過ぎてはいけないと思う。土砂災害の予兆よりも、まずは避難することをもっと議論するべきだ。情報を発信する側は伝えたつもりになってはいけないし、情報が伝わっているか、行動変容につながっているかの確認を疎かにしてはいけないと思う。

○　四国の山間地域は、土砂災害警戒区域が多く、過疎化や高齢化が進んでいる。今後同様の自然災害が発生した場合は、行政が工事費や工期について開示して、復旧の是非も含めて住民と協議するべきだと感じた。地表面傾斜計については、地すべり以外

の予測には限界があり、将来の可能性が感じられなかったため、研究の方向性をもう少し知りたかった。緊急放流の可能性があるダム４２か所のうち、住民を交えて訓練しているのは３か所しかないことに驚いた。住民を交えた訓練をくり返し行ってＰＤＣＡを回していくことが大切だと感じた。ＮＨＫの全国ハザードマップとキキクルの紹介はよかったが、ＱＲコード以外の手法も紹介するべきだ。四国では新型コロナウイルスの影響もあり避難訓練が減り、災害に対する危機意識が低下している状況だと感じる。被災体験のない人も防災意識を高められるように、ＮＨＫは今後も防災に関わる番組を放送するとともに、地域と連携した防災イベントを展開してほしい。

○　番組を通して、西日本豪雨から５年が経過しても被災の傷はまだまだ癒えていないことを改めて認識した。番組冒頭で提示されていた「土砂災害をどう予測するのか」と「避難につながる情報をどう受け取るのか」という２つのポイントに関しては、行政と住民とのコミュニケーションに改善の余地があると感じた。行政は危険をいち早く察知する新しい技術の導入の検討やスピーカーの増設など情報を伝える工夫にも積極的に取り組んでいるが、うまく住民に伝わっていないケースがある。今後は双方のコミュニケーションの頻度を上げ、しっかり伝わる情報にしていくことが重要だと感じた。番組の後半でハザードマップやキキクルの活用方法などを詳しく紹介し、繰り返し災害をひと事と思わず、防災意識を高めてほしいと伝えていたことが印象に残った。多くの視聴者が実際にハザードマップを確認するきっかけになったと思う。今後もこのような実際の行動につながるような番組を期待したい。

（ＮＨＫ側）

これまでも番組でＱＲコードを使用してきたが、誘導する意図が視聴者に伝わっておらず、その活用方法に苦労していた。そのため、今回はＱＲコードを大きく画面に表示して、より丁寧な説明をするなどの工夫した点に気づいてもらえたことはよかった。一方で、ＱＲコードの読み取る難しさやハザードマップの使いづらさについては改めて考え直し、今後に生かしていきたい。今回は４４分の拡大版だったため、２０時をまたぐところに吉田町の中継を持ってきた。その意図としては、番組を見ている人にはこの続きがあることを認識してもらいつつ、２０時に他の番組からＮＨＫにチャンネルを切り替えた人にとっても、残りの時間で役に立つ情報を届けたかった。そこで後半に全国ハザードマップとキキクルの説明を持ってくることで、自分たちに何ができるのかということを伝えたいと考えたが、少し慌ただしい印象を与えてしまった。今回被災者へのアンケートを実施した際にハザードマップなどの情報源が多すぎて何を選んだ

らよいかわからないという意見が多くあった。そこでＮＨＫの全国ハザードマップとキキクルを紹介することにした。ご指摘の通り、キキクルに関しては実際の大雨の日の画面を基に説明したほうが視聴者にとってわかりやすかったと思う。

ＮＨＫ松山放送局
番組審議会事務局

２０２３年６月ＮＨＫ四国地方放送番組審議会

６月のＮＨＫ四国地方放送番組審議会は、１９日(月)、東京第一ホテル松山において、１１人の委員が出席して開かれた。

会議では、事前に視聴してもらった四国らしんばん「大江健三郎が生きた“谷間の村”」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、７月の番組編成、放送番組モニター報告および視聴者意向についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	半井　真司	（四国旅客鉄道 取締役会長）
副委員長	三好　賢治	（伊予銀行代表取締役頭取）
委　　員	阿部　和孝	（松山市農業協同組合 代表理事組合長）
	金行　亜弥	（愛媛新聞社　論説委員室委員）
	上月　康則	（徳島大学環境防災研究副センター長）
	小松　圭子	（有限会社はたやま夢楽　代表取締役社長）
	田井ノエル	（小説家）
	前本　千恵	（三浦工業株式会社 ミウラート・ヴィレッジ（三浦美術館）学芸員）
	三木千佳子	（徳島県邦楽協会会長）
	皆見　信博	（パラ卓球選手）
	村上健太郎	（特定非営利活動法人ＮＰＯ砂浜美術館理事長）

（主な発言）

＜四国らしんばん「大江健三郎が生きた“谷間の村”」
（総合　６月９日(金)）について＞

○　大江健三郎さんの小説は難解な印象があり、番組の内容も難しいかもしれないと身構えて視聴したが、オープニングに内子町大瀬地区の映像が使用されており、親しみを持って見始めることができた。大江さんの小説を松山局の永井伸一アナウンサーが朗読している場面では、大瀬の風景とともにことばをイメージできてよかった。大江さんの親族や中学時代の教師の大星通さんが語った幼少期の話は、大江さんの人とな

りがよく理解できてよかった。さらに周りの人が大江さんの才能を伸ばしてあげたいと思っていたことが十分伝わった。祖母・フデノさんが大江さんに語った森の上に先祖が帰っていくという話が印象的だった。大江さんが大瀬の川で泳いでいる写真や仲間たちが映っている食事会の写真は、大江さんに対して親しみを持つことができた。大江さんが大瀬中学校の生徒たちと交流して、ふるさとについて優しいことばで語っていた場面では、大江さんが大瀬のことが本当に好きであることが伝わった。

○　大江さん自身と出身地である内子町大瀬地区との関係に焦点を当て、静かで落ち着いたＮＨＫらしさのある番組だった。原点である「谷間の村」と大江さんとの関係をひもとく今回の番組は、難易度が高いといわれる大江文学が読みやすくなる内容になっていたと思う。人々の葛藤や模索は、小さな世界であっても大きな世界であっても共通であると感じるため、「四国のことを書いてあるけど、本当は世界のことを書いてるんだ」という大江さんのことばには説得力があった。ノーベル文学賞を受賞したのは、小さな出来事が大きな世界と結びついているという感性やバランス感覚あったからだと思った。普段の「四国らしんばん」よりも落ち着いた雰囲気だったため、最初から最後まで腰を据えて視聴しないと内容の理解が難しかった。軽い気持ちで視聴しようという人には適さないと感じる一方で、番組の雰囲気は大江さんの文学的なイメージに合致していたと思う。

○　大江さんの作家としての原点である「谷間の村」についてわかりやすく説明されていた。この番組を通して、自分の育った場所を大切にすることの価値を大江さんに教えてもらった。四国に住んでいる子どもたちは都会に憧れを持つことが多いと思うが、生まれた場所を嘆かずに、大江さんのようにふるさとを誇って大切にしてほしいと思った。大江さんのことを知らない視聴者にも大江さんの生涯や文学を理解しやすい内容になっていた。一方で１回視聴しただけだと理解が難しい部分があったため、見返したり視聴を止めたりして内容の理解を深めていった。大江さんの作品を読んだことはないが、大江さんは温かく息子を見守るお父さんという印象があり、番組を通して知る大江さんの人柄もイメージのままだった。番組では語られなかった大江さんのエピソードなども知りたくなった。

○　大江さんの作家人生に内子町大瀬地区がどのように関わっていたのかわかりやすくまとめられた内容だった。忙しく生きる現代では、軽視されがちな田舎の人間関係や神秘性などの価値を大江さんの人生をたどって再確認した。中学時代の教師の大星さんの話からは、大江さんがいかに優秀な生徒であったか、周囲の人の環境がいかに大江さんにとってよかったのか十分に伝わった。東京大学助教の菊間晴子さんが、実際に大瀬を訪れて大江さんについて語る場面は、専門家の視点も知ることが出来てとて

もよかった。専門家と地域の方々の両面からの話に加えて、大江さんの過去の番組映像もとても充実していた。また、永井アナウンサーの朗読がとても効果的なよい演出になっていた。番組の最後に紹介された「晩年様式集　イン・レイト・スタイル」の「私は生き直すことができない。しかし私らは生き直すことができる。」ということばの引用はとても余韻のあるよい締めくくりだった。

○　この番組を通して３つの視点で大江さんを見ることができた。１つ目は、「アニミズムの世界に生きる大江さん」である。大江さんは、父の死への納得感を自然の中で得ようとしていた。１つの生命が、その死後に別の生命体となって生き続けるといった命と自然の在り方の原型を私たちに示していたように感じた。２つ目は、「森の外側の現実に生きる大江さん」だ。「今まであるものを疑って自分たちで考えないと自分たちで見つけないと本当にいいものを見つけられない」という直木賞作家の天童荒太さんのことばが印象深く、目に見えているものだけしか考えないようではいけないというメッセージを感じた。３つ目は、「希望を見出し、私たちを励ます大江さん」である。番組の最後に「私らは生き直すことができる」という大江さんのことばが紹介されていたが、人間は生き直せるからこそ、自分自身で考え続けることが大切だということを改めて実感した。

（ＮＨＫ側）

愛媛県出身の偉大なノーベル賞作家を、地元である松山局できちんと伝えなければならないという思いを抱き、４月の最終週に「ひめポン！」で大江さんの過去のＮＨＫの出演番組から映像を活用した「シリーズ大江健三郎」という追悼シリーズを展開した。しかし大江さんを取り巻く人や影響を受けた人を紹介することが中心で、時間の都合上、多くのことを伝えることが難しかった。「ひめポン！」で伝えきれなかった部分を再考して、なぜ大江さんは「谷間の村」を描き続けたのか、なぜ「谷間の村」からノーベル賞作家が生まれたのかという一端を探りたいと思い、記者とディレクターが連携して番組を制作していった。難解な大江文学を分かりやすく伝えることに非常に頭を悩ませつつ、大江さんが伝えようとしていた主旨を失ってはいけないと試行錯誤した。１度の視聴だけでは伝えきれなかった部分があったことは反省している。

○　番組を通して、大江さんの生涯や思想、家族やふるさとへの思いを知ることができた。大江さんがもみの木に触れて語る映像は、大江さんの木に対する愛着や思いがよく伝わった。文章を書くことについて、「ものをゆっくり見てゆっくり考えてゆっくり

表現していくっていう力を養うことになる」という大江さんが大瀬中学校の生徒たちに話していたことばが感慨深かった。また、「四国のことを書いてあるけど、本当は世界のことを書いてるんだ」ということばは、日常で起こることは世界のどこにでも起こりうることだと気づかされて、とても印象に残った。永井アナウンサーの朗読や松山局の宮本真智アナウンサーのナレーションはどちらも柔らかな口調で聞きやすかった。大江さんの映像やことばがたくさん紹介されていたため、ゲストの解説はもう少し短くしてもよかった。また、大江さんのことばがより視聴者に伝わるような編集の仕方や工夫があるとよかった。

○　番組の副題にある「谷間の村」の内子町大瀬地区が愛媛県のどこに位置しているかがわかる地図の紹介があるともう少し親しみやすい雰囲気になったと感じる。また、大瀬の紹介では町民の明るくて元気な活気のある映像を入れてほしかった。昔の映像では若い頃の大江さんが映っていたが、どの年代の映像かわかりづらかったため、テロップでの補足があるとよかった。大江さんとのエピソードを語る人物がたくさんいたため、中学時代の教師の大星さんを中心に登場人物を絞った方がわかりやすかったと思う。天童さんや菊間さんのコメントは、それぞれ専門家としての視点が異なっていてよかった。大江さんが自分の文学の根源がふるさとの大瀬にあることを公言していたことや、大瀬の地域おこしに参加していたことを初めて知り感動した。災害や戦争が続く今こそ、「谷間の村」を通して人間の本質を描き続けた大江さんの生涯を改めて見つめ直す意義があると感じた。

○　大江さんの原点が出身地の内子町大瀬地区にあることに焦点を当てていて、大江さんを身近に感じる構成で分かりやすかった。幼少期のエピソードを交えて大江さんがどんな思考を形成していったのか、その思考が文学にどう反映されたかということを説明しており、とても説得力を感じた。幼少期から周りの人が大江さんの才能に気づいて、認めて伸ばしてあげたいと思って接していたのはすばらしいことだと思った。大瀬中学校の生徒たちに授業をしている場面では、身近なところに目をこらせれば大切なことが見えてくるというメッセージを伝えていて、今の時代にも通じることだと思った。天童さんのコメントは作家ならではの鋭さがあり、内容の理解を深めることにつながった。父の死や終戦などが大江文学に大きく影響を与えていることが分かり、「四国のことを書いてあるけど、本当は世界のことを書いてるんだ」という大江さんのことばには説得力があった。

○　番組を通して大江さんから大切なことばをたくさん受け取ることができた。「ものをゆっくり見て、ゆっくり考えてゆっくり表現する」ということばは、時間の流れ

ではなく番組最後に紹介されていた「豊かな想像力と深いまなざし」であると感じた。それが大人になるということだと大江さんが言っていたが、自分も含めそうした大人がどれだけいるだろうかと考えさせられた。大江さんを取り巻く多くの人が登場することで、それぞれの視点で大瀬を大切にする大江さんの姿を表現されていた。一方で、今の大瀬中学校の生徒が大江さんにどんな印象を抱いているかについてコメントがあるとよかったと思う。また、過去の放送番組から抜粋された映像があったが、放送された年代や番組名の表示があるとよかった。永井アナウンサーの朗読は撮影の角度や背景もバリエーションがあって工夫が感じられた。四国から世界のことを考えることができると実感できた大変よい番組だった。

○　大江さんの出身地である内子町大瀬地区のエピソードを通じて、大江文学の魅力と原点に迫りつつ、現代を生きる私たちに対して警鐘を鳴らすような番組だった。大瀬を「森」と表現し、森の外では戦争や暴力、死があるという世界観が大江さんの執筆の原動力になっていることが伝わった。さらに平和な日本の外には戦争や環境問題といった過酷な別世界があることを暗示し、そのような問題は現代を生きる私たちがしっかり考えていかなければならないということを実感した。大江作品の魅力や原点を深く掘り下げるだけでなく、大江さんの生涯を通して私たちに問題提起をしていることを強く印象づけられた番組だった。大江さんの中学時代の教師や友人、親族、専門家への取材を非常にうまく織り交ぜていたことで「場所には物語を創る“力”がある」ということばを深く理解できる構成になっていた。全体的に視聴者の想像力を喚起させる内容の濃い番組になっていて非常によかった。

○　異彩を放っていた少年期、文壇を引っ張ってきた青壮年期、大瀬と出会い直した壮年期後半と大江さんの生涯が時系列にまとめられていて、大江さんの人間性や作品の変化などをよく理解することが出来た。また、大江文学の原点となった祖母・フデノさんの魂の話、父親の死、村の外で起こっていた戦争という３つの要素を冒頭で紹介したことで、その後の内容がさらに理解しやすくなっていた。高い考察力と思考力のもとで「谷間の村」の本質を捉えて、生涯を通して大瀬を舞台に世界にメッセージを送り続けていたことが伝わった。大江さんの昔の映像と永井アナウンサーの朗読がうまく構成されていて、ことばを大切にする大江文学を再認識するのに十分な内容だった。一方で画面上に大江文学の作品の一覧やあらすじが見られるようなＱＲコードがあると視聴者がより大江文学に関心を持つことができたと思う。大江さんから次世代へのメッセージがたくさん盛り込まれた番組だった。

（ＮＨＫ側）

大江さんが私たちに問いかけているメッセージは何なのかという点は、非常に議論した。大江さんのさまざまな経験が大江文学に大きく影響している。その中でも「谷間の村」のエピソードを通して、死と再生を１つのキーワードにして描いていこうと思い、番組の終盤に「私は生き直すことができない。しかし私らは生き直すことができる。」という「晩年様式集　レイト・イン・スタイル」の引用の紹介をした。また番組の最後には、大江さんが１０歳の時に初めて書いた詩を紹介したが、端的に大江さん自身の世界観を示していると思って引用した。「しずく」の中に別の世界があり、その世界に思いをはせて、理解をしていこうとする心の大切さや想像力というものを示していると思う。また、「しずく」は集団ではなく、個の大切さを説いており、戦争を経験した大江さん自身だから語り得ることだと感じた。過去の番組名や大江文学を紹介したＱＲコードの表示というような視聴者により理解してもらう工夫は、今後注意して考えていきたいと思う。

＜放送番組一般について＞

○　６月４日(日)のＮＨＫスペシャル「アフターコロナ 人と会うのがツラい　～科学で解明！心の異変～」を視聴した。新型コロナウイルスの流行でリモート生活を送ってきた学生が、それまではあまり人づきあいが苦手でなくても、人に会うことが怖いと思うことが増えているそうだ。その原因を究明し、さまざまな対策を講じている学校や企業などの取り組みを紹介していた。四国においてもこうした取り組みや、アフターコロナ時代の新たな課題や異変とそれに対する対策などを紹介した番組を今後期待したい。また、四国遍路に訪れる外国人観光客が増加しているそうだが、コロナ禍との関係や外国人のお遍路さんが何を求めているのかについて取材してほしい。

○　５月２７日(土)に再放送されたあわとく「９０祭　～９０歳だョ！全員集合～」を視聴した。元気な９０歳の方を取材しており、非常に元気をもらえた。一方で取材を受けた方の中には、本当は紫色のちゃんちゃんこではなく、自分の一張羅を着てテレビに映りたかったという人もいたのではないか。取材対象者ときちんと事前に打ち合わせがあったのか気になった。

○　ＮＨＫオンデマンドは、朝の連続テレビ小説や大河ドラマの放送をまとめて見ることができるため、よく活用している。朝の連続テレビ小説は女性が主人公になること

が多いが、「らんまん」は男性が主人公である。牧野富太郎さんをモデルにした主人公を演じる神木隆之介さんがかわいらしく、楽しく視聴している。今後の展開も楽しみだ。

ＮＨＫ松山放送局
番組審議会事務局

２０２３年５月ＮＨＫ四国地方放送番組審議会

５月のＮＨＫ四国地方放送番組審議会は、１５日(月)、東京第一ホテル松山において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「２０２２年度四国地方放送番組の種別ごとの放送時間」について報告があった。続いて、事前に視聴してもらった四国各局平日夕方６時台のニュース情報番組を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、６月の番組編成、放送番組モニター報告および視聴者意向についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	半井　真司	（四国旅客鉄道 取締役会長）
副委員長	三好　賢治	（伊予銀行代表取締役頭取）
委　　員	阿部　和孝	（松山市農業協同組合 代表理事組合長）
	金行　亜弥	（愛媛新聞社　論説委員室委員）
	上月　康則	（徳島大学環境防災研究副センター長）
	小松　圭子	（有限会社はたやま夢楽　代表取締役社長）
	田井ノエル	（小説家）
	三木千佳子	（徳島県邦楽協会会長）
	皆見　信博	（パラ卓球選手）
	村上健太郎	（特定非営利活動法人ＮＰＯ砂浜美術館理事長）

（主な発言）

＜「ひめポン！」（総合　４月２８日(金)放送）について＞

○　大型連休前日の放送のため、県内の観光地の課題や取り組みをはじめ、さまざまなテーマを取り上げていたが、テーマごとに強弱がついたよい構成だった。「岡田武史氏が語る“夢”と“信念”」と「シリーズ大江健三郎　ヒロシマ・ノートに込めた平和への思い」の企画は視聴者に伝えたい意図がしっかりまとまっていた。特に今治ＦＣの岡田武史オーナーへの取材は岡田さんの人柄が十分に引き出されており、岡田さんやサッカーチームに関心を持つことができる内容だったため、地域活性化という点において非常によい企画だと思った。５月１３日(土)のスポヂカラ！「未来のＪリーグを

担うチームへ～ＦＣ今治　岡田武史の挑戦～」(BS1 後 10:40～11:30)も視聴したが、今回の企画内容と関連が深かったため、番組の中でも放送予定の紹介をしてほしかった。また、「シリーズ大江健三郎」のようなシリーズものは、もう少し長い期間ＮＨＫプラスで視聴できるようにしてほしい。

○　明るい音楽で番組が始まり雰囲気のよいオープニングだった。番組冒頭で主なニュース項目や企画の紹介があったが、それぞれの放送開始時間の目安があるとよかった。大型連休前日の放送だったため、県内の観光地の準備の様子を詳しく紹介していた点は非常に興味深かった。特に観光地の駐車場不足を地元と連携して解消したという大洲市の取り組みが非常に印象的だった。「シリーズ大江健三郎」では大江さんが母校の中学校で生徒に向けて語る姿や広島を取材した当時の様子など過去の映像を活用しており、テレビならではの強みだと感じた。大江さんの核廃絶に向けた働きかけが番組を通して視聴者にも十分伝わったと思う。今回のシリーズをまとめた大江さんの特集番組を今後期待したい。松山局の松田利仁亜アナウンサーや荒川紗希キャスターは真面目な印象で好感が持てた一方で、ニュースの内容によって明るい表情にするなどもう少し笑顔があるとよかった。

○　岡田さんの特集が印象的で、今治里山スタジアムが地域の人の心のよりどころになってほしいという思いが十分伝わった。スタジアムはサッカーをするだけの場所ではなく、敷地内に福祉施設やカフェがあり、地域の人たちにとっても期待が高い施設だと感じた。岡田さんの「今治に若者の仕事を作っても東京の若者は来ない」や「自分たちの町を誇りに思って幸せそうに生きていたら人って集まってくる」ということばが印象的で、これからの岡田さんや今治ＦＣの活躍が地域活性化につながってほしいと思った。また、大江さんの特集も非常に心に響く内容だった。大江さんの人柄が十分に伝わり、作品や活動に込められた平和への願いを未来へつないでいきたいと思える内容だった。夕方のニュース情報番組として大変見やすく楽しい番組になっていた一方で、番組冒頭で紹介した主なニュース項目や企画の順番と、実際の放送順が異なっていた点が気になった。

○　観光客を期待する観光地の様子や、駐車場不足を地域で連携して解消したという明るいニュースは大型連休前日の放送に適していた。岡田さんがＦＣ今治の立ち上げ時に新スタジアムを立ち上げると宣言し、その実現に向けて地域の人と丁寧に言葉を交わし、認めてもらう努力をしたことで、今治里山スタジアムが実現したという話は印象深かった。また、岡田さんの日本代表監督時代の経験が糧となり、サッカーチームの経営に信念や覚悟を持っていることが十分に伝わる内容だった。大江さんの特集では「よりよく生きる為には運命を直視しなければならぬ。前進することは悩みの連続

であろう。しかし人間は前進するよう運命づけられている。」という言葉が印象的で、苦労しても目標に対する情熱や覚悟が大切であると勇気づけられた。「＃かぶろう自転車用ヘルメット」の企画では、お笑い芸人のティモンディがヘルメット着用の大切さや実験の様子を明るく元気に伝えていてよかった。

○　大型連休前に知りたい情報、岡田さんや大江さんの企画などそれぞれのテーマのバランスがよく充実感のある内容だった。観光地の準備の様子や連休の天気、見頃を迎えるしゃくなげなど出かけたくなる情報が程よく紹介されていた。岡田さんの特集では過去にバッシングを受けた経験を踏まえ、地元の人に認められるための努力や今回の試みに対する意気込みがよく伝わった。サッカーに関心が高くない人でも興味をひかれる内容になっていた。大江さんの特集は、人柄がよく理解できて、現代の私たちにも共感ができる内容だった。番組ホームページで「シリーズ大江健三郎」の過去の動画を視聴できる点もよかった。「＃かぶろう自転車用ヘルメット」では地元の高校に通っていたティモンディがヘルメットの大切さを説明することで自転車に乗る機会が多い中学生や高校生にも十分伝わったと思う。ＳＮＳでもハッシュタグを活用するべきだと感じた。

（ＮＨＫ側）

「ひめポン！」はＮＨＫプラスで２週間見逃し配信しており、大江さんや岡田さん、ヘルメットの企画の動画や取り上げたニュースは番組ホームページでも見ることができる。放送を見逃してしまった人に向けてデジタルサービスを充実させていることもあり、番組の中でもその紹介をするべきだった。大型連休前日の放送のため、観光地の様子を東予・中予・南予それぞれの地域ごとに取材した。また、「シリーズ大江健三郎」では大江さんの人生を１週間通して振り返るという形で伝えた。６月の「四国らしんばん」では四国の地でなぜ世界的な作家・大江健三郎さんが生まれたのかについて考える番組を予定している。「ひめポン！」で放送したニュースや企画をほかの番組に展開していくことでさらに地域サービスを充実させ、地域の課題を見つめていこうと考えている。さらに「＃かぶろう自転車用ヘルメット」は松山局から全国展開を進めている企画だ。番組冒頭の主なニュース項目や企画の紹介で放送時間がわかりにくいという点は、今後改善していきたい。今後も視聴者の「知りたい」や「見たい」に応えられるように強弱をつけながら丁寧に情報を伝えていきたい。

＜「こうちいちばん」（総合　４月２７日(木)放送）について＞

○　高知県と高知県地産外商公社が近鉄百貨店に県内の事業者の卸売価格を無断提供し、謝罪会見をしたニュースでは、どのような立場の人が発言しているのか分からない場面があったため、所属や名前の表示をもう少し丁寧にするべきだった。高知の伝統文化であるフラフについての特集では、時代に合わせてサイズが小さくなっているという内容だったが、目新しさをあまり感じられず特集の時間としては長いと感じた。連続テレビ小説「らんまん」の特集では、ジョン万次郎について取り上げられていたが、資料館が高知県にあることを知らなかったため、興味深く視聴した。「らんまん」では土佐弁が他県の人に伝わっているのか不安に感じることがあるため、高知局がＳＮＳで発信している「きょうの土佐弁」などを含め、これからも全国に土佐弁のおもしろさを伝えてほしい。「お天気いちばん」から「らんまん」へのコーナー替わりはスタジオの全体の映像だったが、スタジオ中央が空いていて寂しい印象を受けた。

○　前回「こうちいちばん」が事前視聴番組だったのは２０２２年２月で、当時は新型コロナウイルス関連のニュースが大半だった。今回は「らんまん」に関連した明るいニュースや企画が多く、番組を通して世の中の雰囲気が変化したことを実感した。観光において「らんまん」の盛り上がりを実感する一方で、高知県西部ではその効果を実感しづらいため、「ようこそ！らんまん」のコーナーで土佐清水市のジョン万次郎資料館に実際に出向いて取材をしていたのはよかった。「らんまん」の主人公のモデルの牧野富太郎さんは足元の世界に目を向ける大切さや楽しさ、自然と共存する姿勢を私たちに伝えてくれていると感じる。「らんまん」放送終了後もこうした視点や考え方が高知の個性となるような発信を継続してほしい。「知っちゅう？デジタルいちばん」のコーナーでは、ＳＮＳで話題になった投稿を紹介していたが、今後もＳＮＳやインターネットで話題になった情報を日々取り上げてほしい。

（ＮＨＫ側）

「らんまん」に関する企画は高知局のすべての職員が積極的に関わっている。ジョン万次郎資料館についてはリポーターが、「らんまん」関連のイベントの振り返りについては編集担当者が、さらに「知っちゅう？デジタルいちばん」のコーナーには高知県出身のチーフプロデューサーが出演しており、局内総出で盛り上げている。事前に「らんまん」を視聴した上で、どのようなターゲット層に何を発信すればよいかをマーケティングしている。土佐弁については高知県外の人にとっておもしろいのではないかと考え、ＳＮＳで展開するなどターゲットに合わせて情報の発信方法を検討している。さら

にテレビとデジタル両方でコンテンツを展開することでより多くの人に情報を届けることを意識している。「らんまん」放送終了後にどのように高知を盛り上げていくかについては、今後も積極的に議論していきたい。これからも足元の世界をしっかり見つめて、まだ知られていない高知の魅力や信頼できる情報を伝えていきたい。

＜「とく６徳島」（総合　４月２４日(月)放送）について＞

○　冒頭で統一地方選挙の結果を放送していたが、県民の関心が高いため今後も選挙については手厚く報じてほしい。「藤原陸遊のいま、いけます？」では徳島局の藤原陸遊アナウンサーがボートレーサーの喜多須杏奈選手を取材していた。レース前日の検査日だったため、エンジンやプロペラを自分で調整している様子やボートレーサーを目指した当時の様子を取材しておりボートレースのおもしろさが伝わる内容だった。これからも徳島県で活躍するプロスポーツ選手を取材してほしい。サッカーJ２の徳島ヴォルティスについては初勝利に向けた課題を専門家に取材していた。引き続きチームの情報や試合結果などは四国全体で報道してサッカーを盛り上げてほしい。「なつかしの徳島」のコーナーでは３０年前にオープンした商業施設のにぎわっている当時の映像が映し出されていて、非常に懐かしく感じた。コロナ禍を終えて、ことしは観光客で徳島や四国全体がにぎわうことが楽しみになった。

○　明るい雰囲気で始まり、全体の内容もテンポよく進んでいた点と、冒頭でそれぞれのテーマを何時頃に放送するか示されていた点がよかった。また、藤原アナウンサーは落ち着いていて声が聞きやすく、情報を伝えるときと取材するときの状況に応じてコメントを使い分けていてよかった。特に「藤原陸遊のいま、いけます？」では喜多須選手の自然な様子や雰囲気をうまく引き出せていて、普段の人柄とボートレースに真剣に取り組む姿の両方を見ることができて興味深く視聴した。途中から番組を視聴する人もいるため、天気予報を前半と後半に分けて放送していてよいと思った。一方で大型連休にホテルの予約が増えているニュースを後半にも放送していたが、繰り返すニュースはどのように選んでいるのか気になった。「とくしま春らんまん」では、音楽に合った花の映像に見ごたえがあり思わず見とれてしまった一方で、テロップの説明がことば足らずでわかりにくかった。

（ＮＨＫ側）

同じニュースを繰り返し放送しているのは、途中から番組を見た人にも重要なニュースを伝えるためで、最初から視聴している人が再度見ても役に立つニュースを選んでいる。「なつかしの徳島」では

ＮＨＫの過去の映像を活用して楽しんでもらえるように、過去その月に撮影された興味深い映像を取り上げている。「とくしま春らんまん」でテロップの説明が不足していた点は次に生かしていきたい。「藤原陸遊のいま、いけます？」は番組のメインキャスターが視聴者とつながりを持って距離を縮めていくために１年間で徳島県の２４市町村すべてを回ることを目標としている。ご覧いただいた回は著名人だったが、地域の方々を取材するコーナーなので期待してほしい。徳島ヴォルティスは放送当時、なかなか試合で勝てなかったが、地域放送局としてチームが苦しいときも一緒になって盛り上げることで、スポーツを通した地域振興に貢献できたらと考えて特集を放送した。

＜「ゆう６かがわ」（総合　４月２７日(木)放送）について＞

○　冒頭でニュース項目や企画の放送開始時間の目安の表示があるとよかった。「ゆう６特集」の導入で高松局の野口春香キャスターが説明をしている場面にテロップが何もなかったため、キーワードなどが画面上に表示されているとよかった。ＶＴＲの中で、オーストラリアの小麦畑の大きさについて 2000 ヘクタールと表現されていたが、規模が大きく想像がしづらいため、香川県の市町村で例えるとどれくらいの大きさになるかなどの情報があるとよりわかりやすいと思う。また、輸出用の小麦などを品質管理や研究を行う施設のラリーサ・ケイト博士が日本人好みの小麦をつくる様子が取材されていたが、実際にケイト博士が作ったうどんはどのような味がするのか気になった。シドニー支局の青木緑さんがうどん用小麦は両国の友好関係の重要な要素の一つであると表現していたのが印象的だった。「さぬてん」では、気象予報士にもう少し明るい表情で伝えてほしかった。番組の最後にイベント情報をテロップなどで表示するとよいと思った。

○　この時間は家事をしながら、もしくは番組の途中から視聴する人もいるため、ニュースや天気予報を前半と後半に分けて放送している点はよかった。特に番組最後に「まとめてゆう６」のコーナーでニュースをまとめているのは１日の出来事を一目で把握できるため、よい工夫だと思った。新型コロナウイルスが５類に移行するニュースでは、移行後の医療費や、医療機関とコールセンターの対応などわかりやすく説明されていた。「ゆう６特集」ではオーストラリア産小麦について取材していたが、香川県産小麦も改良されているため引き続き取材をしてほしい。「わたしのイチバン！」では野口キャスターと五味哲太アナウンサーが感情を込めたナレーションをしていたため、

投稿者の思いがよく伝わった。コーナーの切り替わりで音楽を効果的に使用していて、めりはりがついて非常に見やすかった。また、関係者へのコメントを使用し、字幕で適切な補足もあったため各コーナーの趣旨がよく理解できる構成だった。

（ＮＨＫ側）

「ゆう６特集」では２日にわたって小麦について放送した。前日の放送では香川県産小麦とその後継品種について取り上げた。そして２日目はオーストラリアからの小麦の実情や研究について紹介した。直接オーストラリアに取材に行くのは難しかったため、シドニー支局に取材を協力してもらった。これからもＮＨＫの持つネットワークを活かして、さまざまな角度から物事を取材していきたい。天気予報については指摘のとおりもう少しわかりやすく、楽しく見てもらえるように改善していきたい。また、番組冒頭にニュース項目や企画の放送開始時間をわかりやすく表示するよう心がけていきたい。番組終盤にあらためて当日のニュースを簡潔にまとめて放送することは非常に重要だと考えているため、「まとめてゆう６」でお伝えしている。５月２２日から「ゆう６かがわ」もＮＨＫプラスで配信されるため、これからも視聴者に喜んでもらえる番組を制作していきたい。

＜放送番組一般について＞

○　５月１４日（日）「Ｊリーグ２０２３　第１０節　『ＦＣ今治』対『愛媛ＦＣ』」（総合 後 1:28～3:35 四国ﾌﾞﾛｯｸ）を視聴した。ゴールシーンではゴール周辺の映像しか映らなかったが、選手の動きを見るために常にスタジアム全体の映像があるとよいと感じた。

○　ＮＨＫプラスで「ヤバいッ！＃交通」と「ヤバいッ！＃介護」を視聴した。キャッチーなタイトルで視聴者に地域課題を身近に捉えてもらうという意図を感じた。お笑い芸人のジャルジャルのコントで、このままでは「ヤバい」未来になることを提起して、その後専門家が課題を整理し解決に向けた先行事例を紹介するという流れで、簡潔にまとまっており、内容も非常にわかりやすかった。「ヤバいッ！」の他のシリーズも期待したい。１０分尺の番組のため、今後もさまざまな番組のコーナーなどで放送をしてほしい。一方でジャルジャルのコントがシュールな内容だったため、世代によっては理解しにくい部分があったのではないかと感じる。また、「ヤバいッ！＃交通」

で登場した名古屋大学の加藤博和教授を番組の中で「博和先生」と下の名前で呼んでいた点は違和感を覚えた。

（ＮＨＫ側）

「ヤバいッ！」は若い世代をターゲットにしているため、インターネットとの親和性を考えて制作した。今回いただいた意見を踏まえてさらに番組内容を改良していきたい。

ＮＨＫ松山放送局
番組審議会事務局

２０２３年４月ＮＨＫ四国地方放送番組審議会

４月のＮＨＫ四国地方放送番組審議会は、１７日（月）、東京第一ホテル松山において、１１人の委員が出席して開かれた。

会議では、事前に視聴してもらった四国らしんばん　スペシャル「シコクディグ～地域おこし協力隊のリアル～」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、５月の番組編成、放送番組モニター報告および視聴者意向についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	半井　真司	（四国旅客鉄道 取締役会長）
副委員長	三好　賢治	（伊予銀行代表取締役頭取）
委　　員	阿部　和孝	（松山市農業協同組合 代表理事組合長）
	金行　亜弥	（愛媛新聞社　論説委員室委員）
	上月　康則	（徳島大学環境防災研究副センター長）
	小松　圭子	（有限会社はたやま夢楽　代表取締役社長）
	田井ノエル	（小説家）
	前本　千恵	（三浦工業株式会社 ミウラート・ヴィレッジ（三浦美術館）学芸員）
	三木千佳子	（徳島県邦楽協会会長）
	皆見　信博	（パラ卓球選手）
	村上健太郎	（特定非営利活動法人ＮＰＯ砂浜美術館理事長）

（主な発言）

＜四国らしんばん　スペシャル「シコクディグ～地域おこし協力隊のリアル～」
（総合　４月７日（金））について＞

○　「番組の始まりに「こんなはずではなかった」ということばが表示されたが、地域おこし協力隊の多くの人が抱えている思いだと感じ、とてもインパクトがあった。協力隊について詳しいことを知らなかったため、協力隊の期間が終わったら隊員は地域を離れるという印象を持っていたが、番組を通して定住が目的で活動していることを知った。これまでの「四国らしんばん」では多くの情報を広く浅く伝えていた印象だ

が、今回は「シコクディグ」という新シリーズとして１つのテーマを深く掘り下げていたため、番組が次のステージに進んだことが伝わった。協力隊に応募した人、受け入れる地元住民、行政などさまざまな視点から考えや意見を取り上げていたため、協力隊の取り組みや仕組みを考えるきっかけになった。協力隊の課題だけでなく成功例として高知県佐川町の取り組みを紹介したことで、これから地域おこし協力隊を広げていくことに希望が持てる構成になっていた。

○　「シコクディグ」という新シリーズが始まったことが一目で分かるように、番組ロゴやテロップ、音楽が工夫されていたことが印象的だった。動画投稿サイトでは、投稿した側の意見のみが注目されてしまうため、ＮＨＫの番組で具体的な地域名を出して、当事者の双方に取材して意見を取り上げていたことはとても意味があった。番組では担当ディレクター２名が第三者の立場でコメントをしており、当事者双方に対して平等に配慮されていてよかった。番組の最後に佐川町の取り組みが紹介されていたが、地域おこし協力隊の問題点が整理され、具体的な改善策が見えるような終わり方でよかったと思う。現役の協力隊員の取材では、四国の他の地域でも同様の課題があることを知ることができた。一方で、顔にモザイクがかかっていたものの声や話し方である程度個人が判別できてしまうため、今後の活動に影響がないか気になった。

○　大変興味深く視聴した。問題の当事者である地域住民と元地域おこし協力隊の男性が、実名で取材に応じていたことに驚いた。佐川町の取り組みでは行政の役割やサポートの重要性が理解できた。一方で番組の中で国や行政への問題提起がされていても、投稿サイトにあげられた動画は地域や地元住民に対してネガティブな印象を持つことにつながる内容のため、切ない気持ちになった。また、「地域おこし協力隊」の名称も検討の余地があると思った。徳島大学の田口太郎准教授の「地域おこし協力隊の方は定住するのであれば公共性を意識すると同時に、地域の人はせっかく来てくれた協力隊の方と積極的にコミュニケーションをとってお互いを気遣い合う関係が重要」ということばは番組のまとめとしてふさわしかったと思う。一方で、問題の当事者である地域住民と元協力隊の関係に対して希望が持てるようなことばがあるとよかった。

○　番組では、話題になった動画投稿サイトの動画について当事者の実名や地名を出して取材をしており、第三者の視点で地域おこし協力隊の問題点を整理していて理解しやすかった。愛媛県新居浜市の別子山地区では、協力隊の業務内容に自由度が高いと感じたが、協力隊の人材不足が背景にあるために自由度を高めて募集しているのか気になった。収益化ができていないサトウカエデや高麗にんじんの畑について紹介されていたが、このような課題は協力隊員に任せるのではなく、行政がサポートして専門的な分野から人材募集をするべきだと感じた。番組ではどちらかを非難するのではな

く、両者に行き違いがあったことが視聴者に伝わる構成だった。協力隊の今後について総務省地域自立応援課の担当者が取材に応じていたが、ひと事のように答えている印象を受けたため、取材相手としてふさわしかったのか疑問に感じた。また、現役協力隊員への取材やスタジオの討論にもう少し時間を割いてもよかった。

○　冒頭で松山局の永井伸一アナウンサーが新シリーズや「ディグ」ということばについて説明していたため分かりやすかった。地域おこし協力隊の現状に切り込み、視聴者に考えさせる番組だった。地元住民と元隊員の両者を丁寧に取材していたため、トラブルが起きたのは考えや意見の相違が招いたことだとよく伝わった。一方で行政が必要な支援をしていれば免れたのではないかと残念に思った。両者ともに顔と実名を出して出演していたため、放送後に影響はなかったか気になった。佐川町の取り組みの紹介はよい参考になったため､今後は定住率の高い地域についても紹介してほしい。自治体や現役隊員へのアンケートからも、両者の食い違いが際立っており、この差を縮めていく必要があると感じた。フリーアナウンサーの竹内由恵さんは移住経験者としての立場や思いを語っており、田口准教授は行政のあり方や課題を的確に指摘していて、ゲストとしてふさわしかった。

（ＮＨＫ側）

新シリーズ「シコクディグ」では、取材をしたディレクターが現場で感じたことをスタジオで語り、データの活用や分析を通して新しい発見を視聴者に届ける点を意識した。四国で働く現役世代にコンテンツを届けることを課題と捉え、新しいことに挑戦して課題に向き合う必要性を感じた。そのため、音楽やテロップのデザインを工夫し、ナレーションに声優を起用することで番組への訴求力を高めるなど制作のプロセスを丁寧に見直した。第１回のテーマに地域おこし協力隊を選んだ理由は、再生回数３７０万回を超えた動画を受けて、協力隊についてまだ知られていないことやもっと伝えるべきことがあるのではないかと考えたためだ。地域住民と元隊員のトラブルに視聴者の意識がいってしまうところを、なるべく早くアンケート結果を示すことで協力隊の取り組みの在り方や運用の課題に対して議論を展開していく構成を心がけた。取材した現役隊員の匿名性については、本人たちと話し合い慎重に対応した。

○　地元住民の中には地域おこし協力隊は給料をもらっているから地域のために働くのは当たり前という厳しい目で見ている人もおり、協力隊員がつらい思いをしていることはよく聞く話だ。取材をしたディレクターは地域おこし協力隊と年代が近いため、

協力隊を取材して感じたことをもっと語ってほしかった。地域外からの転入者が地方で生活することは大変難しく、うまくいくことのほうが少ないと感じる。うまくいかなかった経験を動画投稿サイトに投稿したことは問題だと思った。動画は地域のイメージダウンにつながり、地元住民が協力隊員と交流することに対して恐怖感を抱いてしまうのではないかと懸念した。今回の件に対して行政は何か指導をしたのか気になった。移住経験者としてのゲストの意見をもう少し聞きたかった。今後は、地域に移住してさまざまな課題を乗り越えて定住している人のドキュメンタリーを見たい。

○　動画投稿サイトで話題になった動画をもとに地域おこし協力隊の現状に切り込んでいくという内容でとても興味深く視聴した。地域住民と元隊員の問題について、どちらかの意見のみを取り上げて一方を悪者にするのではなく、両者に取材をして意見のすれ違いや協力隊の仕組みに問題があることを示していたのはよかった。また、両者の意見や考えがよく整理されていて、この問題について理解が深まった。一方で、両者を対等な立場にして番組を構成するならば、放送を避けるべきだと感じる映像が見受けられた。現役の地域おこし協力隊員のインタビューや佐川町の取り組みの紹介から、トラブルを防ぐためには、まず自治体が協力隊員にどのような仕事をしてもらうかという将来像をはっきり示し、協力隊員と共有することが大切だと感じた。地域住民と元隊員の問題においても、自治体の丁寧な説明やサポートがあれば避けることができたトラブルだと思った。

○　オープニングでは、話題になった動画についてインパクトのある映像で紹介しており、地域おこし協力隊について関心を持った。地域住民と元隊員の両者の意見をしっかり取り上げていたのはよかった一方で、スタジオの永井アナウンサーやゲストは差し障りのないコメントが多く、もう少し切り込んでほしいと感じた。動画を投稿したことに対して「後悔していない」という元隊員の発言や、動画によって別子山にネガティブな印象が広がっている現状から、元隊員によくない印象を持つ視聴者もいるのではないかと思った。地域おこし協力隊として慣れない土地にきて地元住民の方と関係性を築いていくことはとても難しいからこそ、しっかりコミュニケーションを図っていくことが大切であり地域の大きな課題だと感じた。「シコクディグ」のシリーズでは今後も地域の課題に焦点を当てた次につながるような内容を期待したい。

○　動画投稿サイトで話題になった動画をオープニングとして取り上げたのは、挑戦的な見せ方だったと感じる。番組中盤で現役の地域おこし協力隊員や自治体へのアンケートを紹介したことで、地域住民と元隊員の問題だけに焦点が当たらないように工夫されていた。また、現場を取材したディレクターがスタジオに出演し、取材

現場で感じたことを伝えていた点は大変よかった。協力隊の成功事例として佐川町の取り組みが紹介されていたが、別子山と佐川町を対比する構成になっていたのは疑問を感じた。対比するならば、協力隊の役割として新しい施策を生み出すことを期待している別の自治体を紹介したほうがよかった。また、総務省への取材は協力隊の取り組みを設計した当時の担当者から導入の背景について話を聞けば、協力隊の現状をより深く掘り下げることができたと感じる。ことし３月には別子山に新しい協力隊が着任したそうだ。今後はその協力隊員についても紹介してほしい。

○　地域おこし協力隊は過疎化や人口減少など課題の多い四国には、重要な取り組みであると感じる。その一方で、行政の関与不足で地域で運用に差が生まれており、別子山の事例に代表されるように、関係者間のすれ違いが発生しやすいことが課題だと感じる。その点を整理したうえで、どのようにしたら協力隊の取り組みの効果を上げることができるか、さらに深く掘り下げた内容を知りたかった。さらに総務省の担当者へのインタビューや行政のサポートについてもより詳しい内容を取り上げてほしかった。竹内さんや田口准教授のコメントは要点を捉えていたものの、協力隊の真相に迫り、問題を深く掘り下げるということであれば、協力隊の仕組みや運用に対して問題提起をするところまであるとよりよい番組になると感じた。「シコクディグ」のシリーズでは四国の課題を取り上げるだけでなく、課題の本質的な部分に触れるような内容を期待したい。

○　新シリーズ「シコクディグ」では、期待通り地域おこし協力隊について深く掘り下げた取材ができていたと感じる。動画投稿サイトで話題になった動画は地域住民側が悪いと一方的に思ってしまう人が多いと思うが、その誤解を解く意味でも番組で取り上げた意義が大きかった。冒頭に協力隊の仕組みや動画の内容について詳しく説明されていたため、動画が話題になった背景を知らない人にも理解しやすい構成だった。協力隊の運用の課題について明確に示されていたため、今後は隊員と地元住民のミスマッチが起きないように改善をしてほしい。地域おこし協力隊は重要な施策であるため、今後はもっと国や地方自治体が責任を持って隊員と地域住民の調整を図っていくべきだと感じた。「地域おこし協力隊のリアル」という副題はインパクトが強く、活動が順調な協力隊に対しても悪いイメージを与えかねないため、副題については検討の必要があると思う。

（ＮＨＫ側）

番組内で地域おこし協力隊について説明するために、前提として視聴者がどの程度地域おこし協力隊について知識があるのかを見極

める必要があり、この点は議論を重ねた。今回は４３分の拡大版としてＶＴＲに時間を割いたが、スタジオ部分とのバランスや時間配分については今後も検討していきたい。現代はトラブルが発生するとすぐにＳＮＳにその問題を投稿する傾向にあるが、その場合、投稿した側の一方的な主張が注目されてしまう。ＮＨＫではそのように情報が独り歩きしたときにどのように向き合うか、また情報発信におけるＳＮＳとの違いについても引き続き考えていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　４月６日（木）放送の「ひめポン！」を視聴した。愛媛大学の入学式を取り上げていたが、新入生のインタビューで大学生になったらお酒が飲めるという趣旨のコメントがあった。新入生は大学入学以降、二十歳になったらお酒を飲むことも楽しみたいという意味で言ったと思うが、そのままのコメントを取り上げると、「大学生になったらお酒が飲める」という誤解を与えかねない。アナウンサーから「お酒は二十歳から」と補足するなど、慎重に扱うべきコメントだったと感じる。

○　３月１２日(日)のドキュメント４「わたし、溶接工になります」（総合 後 6:05～6:35 四国ﾌﾞﾛｯｸ）と３月１９日(日）の「ふたり、ソラに生きる」（総合 後 6:05～6:34 四国ﾌﾞﾛｯｸ)、３月２６日(日）の「にゅーいんさんが遺（のこ）したもの」（総合 後 6:05～6:35 四国ﾌﾞﾛｯｸ）の３番組を視聴した。登場人物のストーリーを知ったうえでドローンの映像を見ると、風景の美しさだけではなく、人の営みを感じられてとても効果的だと感じた。「わたし、溶接工になります」では、若者が手に職をつけて地元産業に貢献していく姿がとても力強く、元気をもらった。

○　同じく「ドキュメント４」の３番組を視聴した。いずれも現代のテーマに合っていて内容の濃いドキュメンタリーだった。今後は四国から世界を目標にして頑張っている人を長期的に取材したドキュメンタリー番組を期待したい。

○　３月１２日(日）と３月１９日(日）放送の「ドキュメント４」を視聴した。とても感動的で胸が熱くなる内容だった。「わたし、溶接工になります」の村井珠夏さんは、日常のエピソードや写真を募集する愛媛県主催のコンクール「愛媛感動ものがたり」で知事賞を受賞している。番組でもその紹介があるとよかった。

○　「ドキュメント４」の３番組を視聴した。放送回によって取り上げる人物や視聴者

層が異なるため、構成や伝えたいメッセージも変わり制作の難しさを感じた。いずれも丁寧なインタビューがあったため、三者三様の生き方がしっかり描かれており見応えがあった。人それぞれの価値観や自己実現があり、それをお互いに認め合える社会にするというダイバーシティー＆インクルージョンがテーマになっていると解釈した。「ふたり、“斜めの地”に生きる」ではナレーションのさだまさしさんの「どんな人生にも贈りものがきっと届くはず」ということばが印象的だった。今後もさまざまな生き方をしている四国の人を取り上げてほしい。

（ＮＨＫ側）

最近、ドキュメンタリー番組の制作を希望する若手ディレクターが多い。今後も「ドキュメント４」を通して、四国で生きる人に向き合いながら、その豊かさや厳しさ、四国で生きるすばらしさを伝えていきたい。

ＮＨＫ松山放送局
番組審議会事務局